

【資料翻刻】高橋亨京城帝国大学講義

朝鮮思想史概説（上）

Lectures on the Outline of the History of Chosen's Thought (1/2):
Typing of Takahasi Toru's Lectures in Keijo Imperial University

権 純 哲*

KWON, Soon Chul

ここに高橋亨の京城帝国大学講義「朝鮮思想史概説」(昭和五年)全六冊を上下に分けて掲載する。翻刻の詳細な要領については、本紀要51-1、52-1の「凡例」を参照されたい。

以下、主な記号の説明である。

- * () : 高橋自身が追加した語句や記述
- * = : 高橋自身が削除した語句・文章
- * — : 権の判断による削除
- * [] : 高橋自身が () と記した補注
- * [] : 引用文の補足・校勘、権による補注
- * □ : 原文上の未読字
- * 字 : 権の未確定字
- * 頭点 : 高橋自身による、赤色鉛筆が多い。
- * / : 改行

なお、文脈に妨げにならないように、補註など小文字にした。また適宜、一字下げの改行を行った。

朝鮮思想史概説 第一冊 昭和五年五月三日

第一章 序説

[思想問題]

[思想の意義]

[朝鮮思想史講義の対象]

* くおん・すんちよる
埼玉大学大学院人文社会科学研究所教授
韓国思想史・東アジア近代学術思想

[支那との関係]

第二章 古代朝鮮の文化

第一節 朝鮮の地域

[支那文化と固有文化]

[歴史的沿革]

第二節 三國以前支那文化の傳來

[支那人の集團的移住]

[箕子傳説]

[箕子傳説の意義]

[檀君傳説]

[小中華]

[三國・新羅思想史]

第〔一〕章 高句麗百濟の漢學

〔一 高句麗〕

〔二 百濟〕

第二章 新羅文化

第三章 新羅の佛教

〔一←〕 1 ~~第一期~~根本佛土説

二 元曉、義相

三 新羅の禪宗

一 南北分派以前の派

二 北漸派

三 南頓派の一

四 南頓派の二

第~~四~~(五)章 新羅君臣の崇佛と道説

〔一 新羅君臣の崇佛〕
〔功德と福田の思想〕
〔菩薩の願力〕
〔護國の思想〕
〔新羅佛教の盛況〕
朝鮮思想史概説 第二冊 講本(A) 第三冊代用
二 道詵禪師
〔地理風水説の將來と功德福田思想との結合〕
〔道詵の傳〕
〔道詵風水説の勢力〕
〔風水説と佛教との不一致〕
〔朝鮮に於ける地理風水の歴史〕
第五章 新羅に於ける三教二教調和論

高麗朝思想史
第一章 太祖と佛教
〔國祚の存廢と法力〕
〔遺訓〕
〔王師・國師〕
〔太祖と道詵との關係〕
二 他の宗派
第二章 高麗の僧階
〔僧科〕
〔僧階〕
第三章 高麗の漢學と科擧
第四章 高麗儒者の佛教觀
第五章 高麗の風水説
〔地理擇地の專職〕
〔佛徒間の地理學者〕 【以上、本号掲載】
第六章 高麗佛教第二期
朝鮮思想史概説 第三冊 (講本 B)
二 師の宗門
第二章 普照國師と高麗禪宗の復興
師禪
第三章 朱子學の輸入及斥佛論の勃興
第一節 安珣と朱子學
一 事蹟

二 學説
三 元朝の朱子學
第二節 斥佛の議論と太學の活動
朝鮮思想史概説 第四冊
第〔三〕章 高麗の道教及其佛教との關係
(以下思想信仰史卷八第二節)
第二節 高麗道教と佛教との關係【中斷】

李朝思想史
序言
第一章 排佛教政
第二章 朝鮮佛教命脈維持の理由
朝鮮思想史概説 第五冊 講本
第三章 李朝儒學の三期
第四章 朱子學の作出せる朝鮮の社會相
一 佛教排斥と巫覡及風水の流行
二 名分の確立
三 春秋大義
四 朋黨分立
五 文學の單純、經學の不發達
第五章 三教調和論 附東學
朝鮮思想史概説 第六冊 講本
三教調和論
一 涵虛
二 普雨
三 休靜
四 松月應祥
五 霜月璽筭
六 蓮潭有一
七 無竟子秀
八 默菴最訥
九 白谷處能
〔東學〕【第六冊終】

第一章 序説

〔思想問題〕

歐洲大戰以後、顯著なる世界的社會的現象と所謂思想問題なる者、世界文明國を通して（國毎に）勃興するを見る。我が日本帝國亦其の埒を脱せず、社會の各方面に亘りて今猶是の問題の解決に焦燥しつゝあり。

蓋し思想問題とは、從來其の國家社會に於て未だ行はれざりし思想、即（~~新しき~~）知識及信念（上面：新しき人生觀に基く所の新しき理念か）（漸く）大衆的判斷に由りて是認せられて盛に大衆を動かし以て遂に舉國汎社會の公議（輿論）となりて國家社會を統制せんとする懼あるを社會的事象なり。故に其の新知識信念（しき理念）にして果して其國家社會を統制するに至れば、大衆的感情は翕然として之に傾倒して之を讚美し之を隨喜し之を支持し、終に進んで大衆的行動となりて（△上面：△あらゆる機關を通して）~~其~~其國家社會の傳統的組織を真然とし（弊衣を脱するか如く）變革して以て其の新思想の具體化する所の新組織となさんとす [Ross / Social Control, ChapterX, Public Opinion 參考]。故に廣義に言へば、思想問題も一種の流行なり。假りに人類文化を精神的（文）化と物質文化に分つ時は、精神文化圏内に於ける一流行的事象に外ならず。

既に流行なり故に其の流行の起るには必ず此に素因（の）存せ（するものあら）さるへからず。例へば、舊流行既に人心に鑿かれて大衆専ら新様式を踴望し、苟も舊套を脱せる新式なれば、何物を問はず一應採り用ひんとする時運に遭遇せるか、將た舊流行尙未だ一般に鑿かるゝに至らずと雖、職業的流行製造者の巧妙なる宣傳に由りて、盛に舊流行の價値を低劣に批判し

て新様式の鮮新的長所を誇張するかの如し。~~今~~の思想問題の起る二者何れに其の素因を置くか、~~此に意見を述ぶるの要なしと雖、何れにもせよ、~~新様式か完全に流行となるに至りては、（國を）擧げて知らず識らず之に追隨し、所謂令なくして行はれ命なくして遵はる。江河（洪水）の堤防を決するか如く、沛然として何物も一時之を防障する能はさるなり。

思想は心理的に分晰すれば（思考を通して生ずる所の）知識と信念なり。其の社會を統制するに至りては公衆的感情伴生し、終に實行に迄發展す¹。思想は種子なり。猶地中に在り。然れど其の機熟するに至れば萌芽し葉となり幹となり枝となり、花開き實結ひ復た無量無數の種子を産す。

〔思想の意義〕

思想は唯た個人の知識信（理）念として止まる限、社會的事象たるに至らず、個人心内の私事（觀念）に過ぎず。故に思想として取扱ふ知識信（理）念は必ず其の（流の）源と其の浸灌（する）社會とを假定す。想源は或は傳説に在り或は（歴史に在り或は）學者の學説に在り（或は△→上面：△大作家の作物に在り）或は宗教教義に在り或は（國法に在り或は）慣習に在りて或は一地方或は一國或は國際に亘りて其の社會人に由りて（知識及信念として）受容られて（◎上面：◎此に（社會觀）人生觀又は宇宙觀を提供し彼等をして此の（社會觀）人生觀宇宙觀に原いて構成せられたる（自己の）世界の裡に生活するに至らしむ。斯くて）程度の差はあるも能く其精神文化を統制す。

故に此に一哲學者或は一宗教家、一政治學者、一法律學者等ありて其學に於て確乎たる思想を打立て之を筆に口に世に發表すと雖、種々の原因に由りて社會に共鳴者を得るに至らず、空しく一固陋學究として終れりとすれば、思想史より觀れば其の懷抱せる思想の價値は之を大なり

と認むる能はず。若し翻りて其の専門學術の領域より觀れば（其原理の）精微を發揮するあるを認むるを得へし。而して更に後世に至りて其の學説の眞義闡明せられて此に隨唱者を得るに至れば（是に至りて）思想史の重要資料となる。是れ思想史と哲學史、宗教學史乃至政治學史・法律學史等と異なる所以なり。思想史に於ける思想の價値は其の根據を社（あくまで社會的根據）あく迄社會的ならさるへからず。

〔朝鮮思想史講義の對象〕

此に朝鮮思想史の概略を講ずる當り、其思想の意義を如上に定めんとす。大體此半島を地域とする朝鮮なる社會に在りて、之を史的に觀て如何なる思想か起伏せるか、換言すれば、如何なる（思想問題起れるか、如何なる）思想流行史を有するか、其の思想の源は何處に在りて（如何なるものなりしか、其の社會統制は如何なる状態なりしか、其の具現的行動まで進めるか否か等の研究検討、即本講義の闡明せんとする對象なり。

今の思想問題は、吾人の知れる限、十九世紀以來の科學の進歩と多數人民（人）の生活困難とを發生の素地として、思想の原理を生物學と經濟學とに求め、論理の形式を尖鋭なる辨證法に取れるものなり。故に科學の進歩と多數人民の生活困難なくは、（是の）思想問題は發生の素地を喪ひ、生物學（學）・經濟學の發達なくは、（此）思想の原理成立せず。獨逸哲學に胚胎せる論理法の進歩なくは、思想の宣傳行はれざるなり。

〔支那との關係〕

朝鮮は其の支那との地理的文化的關係に於て、終に支那思想の藩域を脱し得ざるは、勢の已むを得ざる所なり。吾人は朝鮮の思想史に於て支那思想以外に獨有發生せる者を認むる能はず。巫覡の迷信教は、或は朝鮮原住民族即韓民族の最初よりの原始的宗教にして、今尚其の儀式及

信仰の原態を傳ふるか如きも、更に其の研究殊に滿洲・蒙古・支那内地の其との比較研究の成果に俟つに非されは、尚果して幾許の朝鮮の（獨）創的價値を有するかを知ることを能はず。（◎上面：◎殊に現世の巫覡は多く道教の鬼神、佛教の神將を取入れて、~~古代の形式~~原始的様式を失喪せり。）

支那思想と言へば、儒・道・佛三教に大別すへく、教中に（哲）學あり宗教あり政治學あり道德學あり。又三教互に相交錯し相影響して（思想情態（内容）千差萬別をなすと雖、其の原に溯れば三教に皈す。朝鮮の思想の種（分）類も結局儒・佛・道三教の外なく、思想間の爭論及盛衰も三教間に起れる（事實に過ぎざる）のみ。殊に吾人の意識に最新にして現在の朝鮮の思想も其の引續とも視做すへき李朝思想に至りては、（前代）思想間の爭論（盛衰）決定して、専ら儒教思想（を以て）國家社會を統制する世と時代となり、五百年を通して（大體）思想（上の）争變化も唯た儒教圏内に限らるゝに至れり。

既に儒教が國家社會唯一の統制思想となる故に、國民の（生活的）理想は政治に專注し、國家教育も専ら政治家養成の機關となり、人才皆政治に集り政治の一面獨り（社會の）名譽・利益・權勢を占斷し、諸他社會運營の必要部面は其の當然なる價値を認められずして、發達進歩の能力を止めらる。故に（時代時代の）思想も其か政治と關聯を生ずるに至らざる限、社會統制の作用を發するに至らず、政治（家）は假りに新思想の輸入せられ倡道せらるゝ事ある場合に際しても、其等新思想の朝鮮の政治に有害無益と認むる時は、斷乎として其の宣布を許さず。

思想は到底政治の（強制）力に對抗する能はざるか故に、是の如き場合には無殘に抑壓せられ蹂躪せられて社會事象の表面に現はるるに至らず、稀に山より流出る水の巖石の罅隙を透して地下水となり、復た他日地上に噴出する機會

を俟つか如く~~隠匿したる~~潜伏したる思想として特種の人々の間に（或は）研究せられ、或は信奉せらるゝ事あり。（儒教に於る）李朝晩年の王陽明學、宗教に於ける~~再~~更に晩年の耶蘇教及東學教の如し。

朝鮮の思想は支那思想の領域に屬（し、儒・佛・道三教に皈宗）するか故に、思想の原理に至りては殆と特に新奇として見るべきなし。同時に支那思想を理解せされは、之を理解すること至難なり。但し三教の原理に基く思想が朝鮮の國家社會を統制せるに至れるものとして此に朝鮮文化研究に向て至大の意義を有す。朝鮮思想史の（學術的）價值は其の原理に存せずして、其の社會事象たりし事實其事に存す。従て其の研究は常に政治史文化史と交錯して行は（れ）さるへからず。後世に至り學説と政見と結合し、宗教運動と政治的運動と合流するに至りて殊に然りとなす。

第二章 古代朝鮮の文化

第一節 朝鮮の地域

文化の意義を人間の精神的物質的生活の向上發展と解すれば、其の現れは一切の文化的現象を構成する所の社會的諸事象即政治・經濟・道德・宗教・哲學・藝術・文學等を包含す。されは人間が民族的集團をなして社會的生活を營むに至りては、極めて原始的生活狀態に止まらざる限、既に其處に若干文化の發生を見るべく、又其民族の生命の繼續せられて社會的生活の斷絶せざる限、其の生活が民族（の）原始的生（活）に（~~向を~~）~~逆轉せざる限~~（復歸）すると云ふ場合を除くの外、之を歴史的に觀て必ず何等かの進歩を伴ふ所の變遷を認むべきなり。茲に朝鮮古代の文化に現はるゝ（特異）思想の迹を尋ぬるに當り、先づ其の地域の概略を述ふへし。

〔支那文化と固有文化〕

朝鮮の地理的位置は、北は陸續に、西は一衣帶~~襖~~（水）を隔てゝ（世界）人類文化の發祥地の一なる支那の早期文明の存するあるか故に、支那文化の傳來以外に高度なる固有文化の發生の許されさること、爾他諸蕃夷と同様なり。されは朝鮮文化の幕は支那との交通、換言すれば、支那文化の輸入に由りて切落さる。（◎上面：◎但し近來、此に一個の異説を生し、朝鮮半島を以て反りて（東方諸夷族及）漢人種文明の發祥地となし、支那文明より離れて朝鮮独自の古代文明を認めんとす。其の先をなす者に（檀君教）（右脇：是思想は日韓關係一大轉機を見んとする頃に至りて大に朝鮮人間に唱出されし所謂民族的思想と深き關係を有し、其の最先をなす者に光武八年〔明治卅七年〕開教せる羅喆の檀君教あり、（檀君血統圖を作りて）檀君を以て朝鮮・濊・貊・北夫余・沃沮・肅慎全東胡族の始祖となす。次て）大正十年辛酉印行李炳憲氏の『歴史教理〔錯綜〕談』一冊あり。次て崔南善氏の「不成文化」の説あり。續て檀君に關する諸種の説あり。李炳憲氏の説は人の多く未だ識らざる所、後檀君の傳説を述ふるに至りて概略を紹介すへし。）

〔歴史的沿革〕

吾人の意味する朝鮮、即嘗ては馬韓・辰韓・弁韓の三韓たり、高句麗・百濟・新羅の三國たり。既にして新羅たり高麗たり終に李朝となりし所の朝鮮人の占住せりと考へらるゝ地域は〔濊・貊・靺鞨・沃沮・挹婁等は姑く之を除く〕時に由りて廣狹ありしも大體一定せるか如し。即高句麗の盛時、廣開土王・文咨王の頃には北滿洲に領土を廣開して朝鮮民族、前後無比の大發展を成したるも、後新羅の統三する（に至る）や、頓に地域縮まりて、西北は平安道唐領に入りて洺水〔大同江〕以南に限られ、東北は靺鞨族の建てし渤海國に壓~~さ~~（せら）れて徳源附近を以て限と

なせり。

高麗太祖の後三國統一に至りて太祖平安南道を略取し、睿宗朝の元帥尹瓘は咸鏡南道を略取し、後麗末恭愍王に至りて元の衰亡に乗じて女眞を逐て東北面を侵略して平安北道の碧潼・江界に迄至り、以て其の亡ひんとする時、反りて領土最廣き奇現象を見たり。

李朝は太宗・世宗相續て北邊の開拓に従事し、名將金宗瑞あり、咸鏡北道を取りて慶興・穩城・慶源・鍾城・會寧・富寧の六鎮を起し、又平安北道にも楚山・慈城の地を經略し、後清朝、滿洲より窟起して遂に中原に君臨するや、從來豆滿・鴨綠二江の上流に占居して朝鮮人と對抗せる所謂野人なる女眞族は大舉して滿洲人の後を承けて南滿洲に移住し、其地空虛となりしを以て仁祖朝には自然に勞せずして豆滿・鴨綠二江沿岸の地、朝鮮の領有に歸し、肅宗卅八年に白頭山頂に定界碑を立つ。實に現今の十三道にして、高句麗の盛時を除きては其の領域最廣し。如是領域變遷の經過を有するか故に所謂朝鮮の文化と謂へば、大體今の半島内に在りて發生して（半島内に在りて）行はれしものなりと地域的に定義するを得へし。

第二節 三國以前支那文化の傳來

〔支那人の集團的移住〕

三國以前支那文化の傳來か支那（人）の移住に依ること固よりなるか、之を朝鮮古史に徴するに遠く既に秦代集團的（に於て）支那人の（集團的）移住ありしこと疑ふへからず。（△上面：²所謂箕子朝鮮なる者は『山海經』の海内北經に「朝鮮在列陽東、海北、山南、列陽屬燕」とありて（△左横：△

「注曰、朝鮮、今樂浪縣、箕子所封也。列、亦水名也、今在帶方。帶方有列口縣。」

列水に就て安順庵は以て漢江となし、今西博士は以て大同江となす。今は今西博士に従ふ。）燕

の頃大同江の（北）東に在り。案するに）春秋戰國の代、燕は東北に僻在して獨り遼東の利を占め、其の將秦開は昭王の部將として盛に活躍し、終に地を擴めて大同江に至りしなり。是れ（『三國志』東夷傳注）「魏略」に

「箕子之後、朝鮮侯見周衰、燕自尊爲王、欲東畧地。朝鮮侯亦自稱爲王、欲興兵逆擊燕以尊周室。其大夫禮諫之、乃止。使禮西說燕、以止之不攻。後子孫稍驕虐、燕乃遣將秦開、攻其西方、取地二千餘里、至滿瀋汗爲界。朝鮮遂弱。」

とあるものにして、朝鮮盛代には遠く大同江以西に其の領域擴かりしを證す。滿瀋汗の位地、~~小田氏は鴨綠江となし~~『文獻備考』は遼東に在りとなす。朝鮮都城王儉城即平壤に在りとなすは以て鴨綠江となすを可となすへし（『東寰錄』『海東繹史』（『東史綱目』）は以て遼東三縣各（東部の屬縣瀋汗）となす。（『漢書』地理志遼東郡十八縣の一瀋汗、◎上面：◎尚考ふへし。其の朝鮮半島域内に入るものならば更に好都合也。）

既にして秦六國を統一するに及びて國威益々揚り、長城を築きて遂に涿水即鴨綠江を超ゆ、燕（齊）人多く國を脱して鴨綠江を渡りて朝鮮半島に移住す。是れ『史記』朝鮮傳に（燕）衛滿の朝鮮に王たるを叙して

「稍役屬眞蕃朝鮮衰夷及故燕齊亡命、王之、都王儉。」

と云ひ、又『三國史記』卷一新羅始祖三十八年に

「前此、中國之人、苦秦亂、東來者衆多。處馬韓東、與辰韓雜居。至是寢盛。」

と記する所以なり。衛滿、王となりて所謂箕子の四十（餘）世後箕準を逐ひ、準（船によりて）南走して馬韓の地に入り自立して馬韓王となり、金馬郡に都す。而して衛滿の孫右渠に至りて朝鮮半島と漢との交通を沮して達せしめず。武帝、赫怒して（將軍楊僕・荀彘を遣し）王儉城を攻取りて朝鮮の地を郡縣に編入す。元封三年（前

一〇八年]なり。斯くて(○上面:樂浪・玄菟・眞蕃・臨屯)四郡朝鮮に入~~る~~(り、郡縣制布かる)。

然れ~~ども~~是の間、支那の文化果して如何に朝鮮に影響(輸入)せられしか、今箕子の(治化の)教條(傳説)の外、文獻徴すへきなし。但た彼等支那の流氓か其の日常生活を通して未開の韓民族に種々の文化を傳へしなるへきを想像すへきのみ。(△上面:△『三國志』魏志東夷傳濊の項に

「濊南與辰韓、北與高句麗沃沮接、東窮大海。今朝鮮之東、皆其地也。戸二萬。昔箕子既適朝鮮、作八條之教以教之、無門戸之閉而民不爲盜。其後四十餘世、朝鮮侯准、僭號稱王。陳涉等起、天下叛秦、燕齊趙民、避地朝鮮、數萬口。燕人衛滿、魑結夷服、復來王之。漢武帝伐滅朝鮮、分其地爲四郡。自是之後、胡漢稍稍別。」

とありて四郡以前迄は、或は箕子の裔と稱し、或は朝鮮王・朝鮮侯と稱する者ありしも、皆東夷固有の風俗文化に和光同塵して、別に支那の風俗文化を以て治めんとはせず。四郡制立ち漢人の官吏多數來り、治むるに支那の制度を以てするに至りて始めて、治者階級は純漢風を以て生活し、被治者階級は依然舊俗を捨てず。是に於ては一國內、胡・漢の兩人兩俗、判然と~~分~~相分ると~~なり~~云ふなり。而~~して~~是事は獨り濊のみならず、夫余・高句麗・東沃沮等を通して之を謂ふへきなり。)

漢の四郡の境域には南北二説あること、人の知る所。即眞蕃郡の位地に就て今西博士の唱ふる南方説は(今の)忠清南北道及全羅南北道となすに、(那珂博士及白鳥博士の)北方説は鴨綠江中流域及佳佳江流域となす。従て南方説によれば、眞蕃の住民は韓民にして、北方説に従へば高句麗族即扶餘族となる。而して昭帝の始元五年[前八二年]濊・貊及韓族の猖獗なるに堪へず、四郡の中、臨屯・眞蕃二郡を廢して樂浪・玄菟

の二郡となる。後樂浪獨り盛にして其の郡治の(所)在~~地~~は今の(平壤)大同江の對岸の土城圍み古墳集團する處なるへしと攷證せらる。後漢末獻帝の建安年中[一九六~二二〇]樂浪の外に帶方[帶水即漢江、帶水の方の意歟]をおきて半島西南部を管せしむか、漸次北の高(句)麗、南の百濟の強大となるに従て終に之を支持する能はず、郡廢せらる。其殘民即漢人は滿洲に移~~る~~(り、樂浪・帶方の名稱、遼東(南滿)に残る)。事は晋の建文元年[三一三]にして漢武置郡以來、四百十一年を經過す。此間、支那の時代は前漢・後漢を經過して其文化頗る進歩せり。

今の所謂樂浪出土品は即當時の文化の一端を(表)證する者にして磚瓦・陶器・銅器・(玉石)・漆器・土工・繪畫等に亘りて簡樸の内に氣力あり巧妙(緻)あり、世界の珍とする所。殊に漆器の如きに至りては其の蒔繪の方法、到底今の人の考へ及はざるものありて、殆と漆液を墨汁の如く(意の儘に)使用するものゝ如しと云ふ。斯く長年月の間、半島の西半部に打建てられたる漢人の統治は、後の高句麗・百濟に向て如何なる文化的影響を遺せるか、今文獻及徴古資料に乏しうして之を討究する能はず。

然れ~~ども~~案するに、樂浪・帶方の漢人郡縣は、高句麗・百濟の立國か民族移住なるとは事情を異にし、大概官吏を主體となし~~て~~之に附隨する若干用度供給の生業者より成りて^{さなが}宛ら今の東西植民地~~統治~~の本國人の生活に類するなるへし。されば樂浪・帶方二郡々治の所在地には相當數の漢人住居³し、漢人文化に依る~~る~~社會生活(相)を現出せしも、地方に入りては依然として土著人の社會なりしなるへし。されば一朝廢郡となるや、彼等官吏たる漢人は相率ゐて斯土を引揚げ、之に伴て大部分の漢人住民も滿洲若くは本國に移轉し、之と同時に漢人文化も大部分茲土より拂除せられしなるへし。

但し尚攷ふるに、(假りに)是等有形(漢人)

文化は替り住める高句麗・百濟に引繼かれさりしとするも、精神的文化即支那文化の崇拜觀念を始とし、漢字漢籍の普及の如きは牢乎として茲地に根著けられしこと疑を容れず。従て其の風俗好尚に於ても漢人の其を模倣せる儘茲土のものとなりしもの亦少からざるへし。例へは稱姓の俗の如きも或は起原を此に求め得へきか。

(△上面：△

又現存する樂浪遺蹟の墳墓の廣大にして死者を葬るに財力を窮めしは、支那上代死者の靈魂か其の子孫の祭祀を受くるを喜びて又子孫に對して福利を護すと信する思想の明瞭なる(表)現にして、此か土人に對しても葬祀の觀念の原を與へ、以て高句麗時代風水説信仰の素地をなせるを推料すべく、猶又先年物故せる考古學大家高橋健自博士の朝鮮の旅行記に於て高句麗墳墓の出土品及壁畫と樂浪の其とを比較して其間の連絡點を述へて曰く

高句麗瓦に三特調あり

1、樂浪瓦同様に圓面を線に由りて區別し、其の空間に文様を嵌込むコト

2、其嵌込の文様に蓮花文を應用するコト

3、其文様全體、新羅・百濟に比して力強きコト
江西古墳の壁畫に由りて、當代人即高句麗人の死後の世界か現世と同一原理に立つ者と思ひし如し四神塚や雙楹塚等の墓に主人公夫妻の樓閣中に坐するを描き、其に侍するに侍人あり、未來世を現世の延長と考へたり〔眞池里雙楹塚の壁畫には四神日月斗拱、主人夫妻侍人は僧侶力士を描く〕。但し今日迄の高句麗墳墓の総へては(其位地に即きて)若干風水觀念の辿るへきを認むるの外、冢内一片の遺物を發見せず。従て樂浪との比較至難なるを恨とす。)

〔箕子傳説〕

而して此等支那崇拜の思想の中、最較著にして而して後世朝鮮に大なる思想的勢力を遺し、ものを箕子の朝鮮の王たりし傳説の發生となす。

本傳説は朝鮮~~と~~(の)支那~~との~~(に對する)文化的從屬關係を定めし起源を物語るものにして爾後朝鮮か小中華と誇り、極力支那の制度・文物・風俗一切を模倣して甘心し、又政治的にも其の支配を仰きて満足せる、文化的政治的事大主義の~~是認~~(成立)に向て常に潜在意識的に働きて力強き統制的思想となれし。

箕子と朝鮮との關係の研究及攷證は、古來幾多の三國の學者か充分に研究し盡して殆と餘蘊なし。只た(若干)其の結論若干を述ふれば足る。朝鮮人の箕子に關する著述は(宣祖朝の梧陰尹~~根~~(斗)壽の『箕子志』、英祖~~王五十二年~~(正祖元年)丙申徐命膺の編せる『箕子外記』二篇あり、後李太王十五年奇正鎮等か『箕子志』を補遺して編せる『箕子志』九卷を主なるものとなす。外に(栗谷の『箕子實記』、韓~~夫淵~~(致齋)の『海東釋史』卷二箕子朝鮮部、(南九萬の『藥泉集』東史辨證二箕子、)尹廷琦の『東寰錄』の卷一箕子朝鮮、丁茶山『疆域考』、(安順菴の『東史綱目』卷一、)『增補文獻備考』等參考すべきもの。

近來日本の白鳥博士は『滿洲地理歴史』に於て、今西博士は「箕子朝鮮傳説考」〔『支那學』2-10,11,1922〕に於て、最後に崔南善氏は「朝鮮史의箕子^는支那의箕子^가아니라」に於て、詳細に本傳説を論究せり。『箕子志』『箕子外記』『(増補)箕子志』の如きは固より箕子を以て朝鮮の開國王として一毫の疑をも容れず、唯之に關する支那の史料を網羅せるのみなり。學者の研究たるに價せず(◎上面：◎獨り藥泉は之を疑ふ。)丁茶山の『(疆)域考』は其の博~~夫~~學慎密なるを以て亦本傳説を疑ふ説を豫想しつゝ、尚箕子の平壤に來れるを肯定せんとす。

而して白鳥博士は全然之を否定し、戰國時代に朝鮮半島に據れる箕子の後裔と稱する箕否なる者の祖先か自家の門閥を高めん爲に箕子を借來りて其の系譜を裝飾する用に供せるなるへし

となす。今西博士は(△上面: △前述「箕子考」には言はされ~~れ~~、古) 朝鮮を以て漢江以北に在りとなす關係上、或は箕子平壤に來れること絶無の事となすへからずとなすものゝ如し。崔南善氏は全然之を否定して、箕子の封地を以て山西省太原附近今の正定府~~正~~(新) 樂縣なる鮮虞なるへしとなす。

案するに箕子來鮮の最古の史料は『史記』宋世家にして、反りて殷本紀・周本紀及朝鮮傳には之を記さず、~~伏書の傳なる~~『尚書正義』に亦見ゆ。然れ~~れ~~『史記』によれば) 殷滅後、箕子は復周に來朝して途に殷墟を過ぎて麥秀の詩を作りて之を悲み、又箕子の墓と傳ふる者、殷故都商邱附近に在り(○上面: ○遼東廣寧城北五里許に箕子井あり又舊箕子廟)。彼か當時全然化外東夷の地、殆と中國と往來交通絶無なりしと想像せらるゝ平壤まで來りて之に王たることは、普通の常識に於て攷ふるを許さるなり。但し『史記』は宋の(古) 記録を得て宋~~微子~~世家を作りしものなるか故に、宋に既に古くより是の事、記録として傳はりし事は認めざるへからず。宋は殷の子孫の國なるか故に、殷の宗室子孫の成行に付ては他國に比し最詳細に之を傳ふと視ざるへからず。而して他方朝鮮の地に於ては、今の「魏略」『後漢書』に據れば、春秋戰國時代に朝箕子の子孫と稱する者朝鮮侯として支配せるか如し。其の後裔(朝鮮王) 箕否は即(周末) 秦初の人、否は即準の父なり。~~されは~~而して準は箕子の後四十餘世と傳へらる。

されは宋に箕子來鮮の事を傳へし~~者の源は箕否の朝鮮に在ること疑ふへからず~~(傳説の源は○上面: ○朝鮮侯にして(箕子の封せられし國名を取りて姓となしたる) 自ら姓箕と稱せる(箕氏の) 最初の者に在ること疑ふへからず。而して其果して何人にして何の時代に屬するか明かならず、今知らるの最古者は即箕否、其人なり。)

(△上面: △今西博士は『三國志』の箕準の朝

鮮より南走馬韓に王となるを叙~~し~~(する)「將其左右宮人、走入海、居韓地、自號韓〔王〕」の註を引ける)「魏略」に

「其子及親、留在國者、因〔冒〕姓韓氏。」

とあるに由りて樂浪韓氏の偽造に係るものとなす。尹根壽『月汀漫筆』に箕子の事を録して亦此に及び

「箕準爲馬韓(王)、其後乃爲韓氏。我國凡清州等韓姓、皆箕準之後云。此說出魏略。然雖曰後裔、而未知端的與否。)」

而して何故に朝鮮侯なる者か箕子を~~子孫~~先祖と冒稱せるか。本より東方人の中國文化に憧憬して其地方中有勢族となれる所の者か族の起源を中國の名姓に發見せんとする政略的虚榮心を以て第一の原因とはなすへしと雖、外に稻葉君山の『支那學』第二卷十二號〔箕子朝鮮傳説考を讀みて〕に於て述へしか如く、支那「天文分野圖」に起原をおくものならさるかと思像せざる能はず。

飯島〔忠夫〕博士の『支那曆法起原考』に據れば「(天文) 分野圖」の最古きは『淮南子』天文訓にして次を『史記』の天官書となす。廿八宿を十二辰に大別して之を地上の十二州に配當して、各辰中の天象運行に因りて其の配當州内の事象を占する組織なり。而して『淮南子』『史記』共に箕を寅に當て東北方の星にして州として燕に當つ。燕は即遼東(朝鮮)をも含む。飯島(博士)は「天文(分野)圖」の成立を大體五行説と同時の戰國半頃と推定す。(其の) 朝鮮に傳流して(其の曾長) 是れ箕子の來りし國なるか故なりと附會して自ら其子孫と冒稱するに至りしものならさるか。され~~れ~~是は單に一の想像説に過ぎず。

但し後元か濟州を取りて其の房星分野に當て、房か即天帝の車馬を主り、天駟と名けらるゝに^{かたど}象りて茲に牧場を開けると對し考ふる時は、若干可能性ある想像説となすへきか。

【箕子傳説の意義】

既にして漢四郡時代となりて、朝鮮と漢との交渉及交通益々頻繁となり、朝鮮より諸記録及諸情報、亦漢政府に達するに至る。而して漢廷(として)は朝鮮を統治して民心を収攬するに助となるへき諸記録及情報は出来る丈、之を採上げて以て之を内外に知らしむる政策を取る(は當然なり)。箕子が朝鮮開發の祖王たりしとの朝鮮に傳へらるゝ傳説は是政策に向て尤適應せる材料たらさるへからず。是に由りて(於て)『史記』に在りては、單に宋世家に(僅に)一行の記事として現れしに過ぎさりし(箕子)朝鮮王の記事か『漢書』(地理志)に至れば、大に發展して

「殷道衰、箕子去之朝鮮、教其民以禮義田蠶織作。樂浪朝鮮民(設)禁八條。」云々と稱し、之に次て箕子の化の四郡當時に残れるを擧言て

「郡初取吏於遼東、見民無閉藏。及賈人往者夜則爲盜、俗稍益薄。今於犯禁寢多、至六十餘條。可貴哉、仁賢之化也。」

以後、魏の魚豢の「魏略」に至りて一層詳細なる事實を載せ、陳壽『三國志』の東夷傳には大體「魏略」を襲えて若干異録を挿む。

要するに、始は朝鮮酋長の族譜製造の一巧計に起りて(流傳して)殷の後宋國に入り、終に(司馬)遷の修史の材料として提供せられ、漢代東夷懷柔四郡統治の政策として利用せられ、愈々事實らしく潤色せられ詳細を加ふるに至れるなり。是の點、崔南善氏の説、吾意を得たりとなす。

支那本土、既に箕子を以て朝鮮開國聖王となす。朝鮮の諸國の之を信してすること洵に當然なり。故に四郡滅ひて北は高句麗、南は百濟之の地を占有するや、亦箕子を以て理想の聖君にして東方開發の祖王となす。

~~蓋し是の如きは亦高句麗百濟が漢人を逐出して~~

~~漢人に代りて韓民族を統治するに向て有益なるは言を俟たず由りて以て高句麗百濟亦~~
漢人に代りて朝鮮半島の治者となりし高句麗及百濟は同うく所謂東胡(夫余族)にして、元と滿洲に占住せるか、前漢の初匈奴の勃興の爲に逐はれて漸次東南下し、半島に入り來りて國を打建てしなり。而して被治階級たる一般人民は韓人種にして即半島の原住民なり。東胡と韓民族は果して如何なる民族的の差違あるか、今之を詳にする能はず。

東夷及三韓の風俗は『魏志』に載せられ、高句麗と夫余とは本と同一種にして言語生活狀態多く相同しとなす。(夫)余は五穀を産することを知れども、其官に名つるに六畜を以てし、牛馬を以て貨幣の如く使用せるを以て考ふれば、恐く牧畜業を本業とし廣漠とある平原に遊牧したるなるへし。之に對して三韓は夙に農を本業とし早く桑蠶を知り綿布を織るを知れりと云ふ。其外、宗教として天象鬼神を祭るか如きは一般未開人の共通にして二種民族相同し。『後漢書』東夷傳には、高句麗は遼東の東に在りて南、朝鮮・濊・貊と接すとあり、後「魏書」には、始祖東明王朱夢は夫余より出つとなし、此に河伯女大卵を生む傳説を録す。(『三國史記』之を取る。)

百濟は『後周書』及『隋書』(『北史』)に據れば、其地馬韓に屬せるか、夫余東明王の後仇台なる者來りて此に國を立て終に全馬韓を取るに至れるなり(△)(とす)。『三國史記』は仇台を稱して始祖溫祚王となし(を)高句麗と同じく其世系夫余より出るか故に夫余を以て氏となすと云ひ元年夏東明王の廟を立つることを記す(の始祖朱夢東明の子となす。△○上面:△○『東史綱目』⁴は(三國史の録する一説に従て)東明王の百濟の始祖たるを否定し、夫余王の夫妻の庶孫優台[或は官名か]を以て百濟初王溫祚の父となす。但し東明王、溫祚を視ること子の如く

にしたるを以て温祚、東明王を廟祀すと。何れにもせよ百濟の高句麗と同うく夫余族に出ること明なり。△上面：△~~高句麗（其地）皆見朝鮮に接すれば其の未だ（南下して）樂浪の地に入來らざる以前既に或は朝鮮か古箕子の國たるを習聞して之を信したるなるへく高句麗と同一民族ある百濟亦然らざるなきを保せず~~

朝鮮の治所、平壤に在りしか故に、所謂朝鮮の地は高句麗の所領に歸す。此地、既に箕子の傳説あり、從來の漢人亦之を認めて箕子開發の地となす。故に今高句麗來りて此に王たるに及びても、箕子を尊て以て開國聖君と立つるは、民心を安靖にし教化の基を立つるに於て洵に當然なり。百濟の國は馬韓の舊土にして此は曩に箕子後裔と稱する箕準の（衛滿に逐はれて）朝鮮より逃來りて此に國を立てしものなり（△上面：△所なり。百濟亦（の）韓民亦或は既に箕子の朝鮮開國王たるを信せるなる。斯くて）箕子朝鮮開國の説の（韓）民に向て宣傳せられ、馬韓の箕子文化系統に入りしこと既に頗る古し。而して高句麗か箕子を尊崇するは代を逐うて益々盛にして、『周書』高句麗傳までは國の神廟二ありて一は夫余神 [婦人]、他は其子にして即河伯女と朱蒙を祭ると記するに、『唐書』高麗傳に至りては

「俗多淫祠、祀靈星及日箕子可汗等神。」

とありて、箕子を文化開祖として國祖可汗神と相並へて祀りて既に此是時高麗肅宗七年、箕子墳塋を求め祠を立てし先驅をなす。

斯くて高句麗・百濟二國は、其文化の緒を古朝鮮に尋て、箕子を以て文教の開祖にして理想の聖君となすを得たり。他の他の一國新羅は後遂に高・百二國を併呑して開關以來最初の半島統一國家を現出す。若し新羅創建の傳説に何等箕子との直接若くは間接の關係を物語る者なくは、新羅獨り高百二國と箕子文教の源流を蒙らず、

（△上面：△箕子文化と離れて）單純東夷の國と

ならざるへからず。是は新羅として忍びざる所なり。故に金富軾の『三國史記』を編するや、開卷第一新羅本紀に於て

「始祖朴氏、諱赫居世、前漢孝宣帝五鳳元年甲子四月丙辰即位、號居西干。時年十三。國號徐那伐。先是朝鮮遺民、分居山谷之間、爲六村。一曰關川楊山村、二曰突山高墟村、三曰觜山珍支村、四曰茂山大樹村、五曰金山加利村、六曰明活高耶。是爲辰韓六部。」

是れ（金富軾か）新羅か高麗古記に據りて録せるものなるへく、朝鮮の遺民と云ふは『後漢書』〔東夷傳韓〕の

「辰韓耆老、自言秦之亡人、避苦役、適韓國。馬韓割東界地、與之。」

とあるを恣に改訂せるものなること言を俟たず。而して斯く改訂して始めて新羅國家の源流を箕子に叙しに、新羅文化の亦畢竟百濟・高句麗と同様に箕子に淵源することゝなせり（るに至れり）。箕子傳説の發展驚くへく、殆ど箕子は文化的に朝鮮を統一せりと謂ふも可なり。（△上面：△「」△に入れる。）「李朝に至りて箕子開國の思想依然變らず、太祖元年國號を改めて朝鮮となす。時に朝鮮よりは朝鮮・和寧の二號を奏す。明太祖曰く

「朝鮮之號稱美、且其來遠矣。可以本其名而祖之。」

~~亦以て~~當時朝鮮は固より明國迄、半島か古代箕子朝鮮國たるを信せるを證す。」

（上面：箕子を以て朝鮮開國の聖王となすは、儒教主義を以て治國の經と立つる朝鮮に取りては尤都合よく、之に由りて益々儒教々化の權威を大にす。前問恭作〔1868～1941〕氏は「庶孽考」⁵資料に資料に於て朝鮮か箕子を取入れしは、其治化八條中に奴婢の一目あるか、朝鮮社會組織とよく相合する爲なりとて『高麗史』奴婢條序論「東國之有奴婢、大有補於風教、所以嚴内外等貴賤、禮義之行、靡不由此焉。」

を引用す。是は面白き意見なるも、恐らく反對に箕子の

八ヶ條の中奴婢ある事か朝鮮社會組織と適合する爲なりと視做すへきか。兎に角箕子の八ヶ條なる者は朝鮮の政治及社會組織の形態に重大なる關係あるトは否定すへからず。）

〔檀君傳説〕

（一然の）『三國遺事』に至りては、朝鮮北方山地の一傳説と惟はるゝ檀君天降して國を立つと云ふを以て朝鮮の開國となし、(◎上面：◎以て帝堯の時代となし。爾後)檀君子孫相繼て王たり。後周初に至りて箕子封せられて此國に王たり。檀君の子孫避けて王位を讓るとなし、以て巧に開國傳説と箕子傳説とを聯絡せしめたり。

「李朝に至りて箕子開國の思想依然變らず太祖元年國號を改めて朝鮮となす時に朝鮮よりは朝鮮和寧の二號を奏す明太祖曰く

「朝鮮之號稱美且其來遠矣可以本其名而祖之。」

亦以て當時朝鮮は固より明國迄半島か古代箕子朝鮮國たるを信せるを證す。」〔前に移す〕

（上面：檀君傳説は、半島の北方（山地）に盤居せる東胡の有する山神岳崇拜より來る、山神か人間事の禍福に大勢力ありと信する、上古宗教的信仰に基くものにして、遠く『山海經』の山神の半獸半人の形體を有し、能く種々の不思議を現し、其の爲に或は風雨火水を呼起すことあり、故に年に之を犠牲を備へて之を祭るとなすものと一脈相通するものあるとなす。従て漢江以大同江以南韓民族の間に發生せる傳説にはあらず。況んや。海岸より發祥して最初の半島統一者となりし新羅人の傳説にはあらざるなり。東山經

「東次三經之首、自尸胡之山、至于無罽之山、凡〔十〕九山、六千九百里。其神狀皆人身而羊角。其祠、用一牡羊、米用黍。是神也見則風雨水爲敗。」

北山經に

「獄法之山〔…〕有獸焉、其狀如犬而人面、善投見人則笑、其名山獬。其行如風、見則天下大

風。〕」

然るに併合以後、朝鮮人間に民族（獨立）意識強烈となるや、努めて從來の歴史を洗つて支那文化の影響を取除ける、朝鮮自體の文化の存在を闡き出さんとし、檀君を以て日本の天照皇大神に當てゝ朝鮮民族の始祖となし、其頃既に朝鮮に一種の文明ありしとなし、他方、箕子を朝鮮より排除してす（せんとなす）。而して是の企ては檀君の事傳説の結局（未開人の）荒唐なる傳説なる限、支那の高度文化に對抗する文化存在の證左とならざると同時に、事實上の箕子の來鮮は之を否定し得へきも、理想的聖君、朝鮮文化開發の教主として箕子は到底（朝鮮）歴史上拂拭すること能はざるを忘るゝものなり。亦一時反動的思想和視るへきのみ。

〔小中華〕

漢四郡撤退せられ半島に三國鼎立するに至ると雖、箕子開國の傳説は眞實として信受せられ、

（三國共に）文化的には支那本國を以て本宗となし、且又自ら處ること他の蠻夷の若くならず、必ず一意中國の禮儀典章を學ひ受けて以て開國聖君の遺圖を辱むるなからんと努む。是れ實に三國君臣をして政治的には支那の羈絆を脱しつつ、文化的に支那の文化を奉し、其の文化圏内の一員として飽く迄之に従屬せる所以なり。

（△上面：△故に箕子開國の傳説は古代朝鮮の（有せる）支那文化に對する服從の思想にと他民族に對して自負する（有する）文化的誇との説明に自負と（〔に〕由り來る所の好個）の説明にして而して後來朝鮮人の小中華と自稱し、孔子の東夷を稱せるを揚せるもの皆之に由りて説明せらる△稱揚せる東夷を以て自ら處れるもの等皆、是の意識の發露ならざるはなし。上面右：△⁶故に支那より儒教傳はるれば喜ひて儒教を受けて之を學ひ、佛教傳はれば亦喜て佛教を受けて之を信奉し、道教遣さるれば亦喜て謹んで道教を受けて之を尊崇す。支那の思想變化は亦遠

からず朝鮮にも傳はりて同様の思想變化を現はす。例へは滿洲に起れる低氣壓の必ず一定時間後ては半島にも進行し來るか如し。今先つ半島内に支那の三教傳來の最初の史實を述へ、以て漸次是等三教の半島内に於ける思想的變化を叙せんとす。

〔三國・新羅思想史〕

第〔一〕章 高句麗百濟の漢學

〔一 高句麗〕

（□上面：□『東史綱目』の三國始起に於て論する如く、三國の始まるは些^{いささか}漢武帝以前に在り、其名既に支那に知らる。而して金富軾の『三國史』を撰するや、猶内外史料の拾搜を缺き、遂に高句麗・百濟二國を傳ふること甚簡略なるに至れり。況んや）

三國以前（の韓半島）支那文化の輸入は其迹茫乎たり。姑く之を措く。（◎左脇：◎但し漢代の支那は秦皇（法刑を以て）思想統一の後を承けて儒教を以て國民思想の統一を圖りたれば其の四郡及二郡に與へたる□→上面：文化的影響も儒教に於て最優勢なりしは想像するに難からず）
~~三國鼎立に至りて朝鮮の史乘の文獻徴すべく~~
~~（し）支那の文化輸入の~~

朝鮮半島の歴史、三國鼎立に至りて始めて尋めへく、支那との交通も漸やく頻繁となり、漢學傳來支那文化輸入の迹、明かなるに至る。但し漢學・漢籍殊に儒教々理を載する經書の傳來は既に遠く漢の郡政當年に在りしは固よりなり。而して漢代は儒教の外、老・莊・申・韓の學、儒と相並ひて盛に行はる。恐らく老子の書も意外に早期に半島に輸入せられしなるへし。

三國中、最早く支那と交通せるは高句麗なり。高句麗、本と遼東より興り、逸早く遼西燕の地方と交通し、『三國志』に（○上面：○高句麗傳に）據れば、高句麗は漢時常に玄菟郡に往て朝

服衣幘を受けしか、後やや驕慢となり、復た郡に詣らす、東界に小城を築き、朝服衣幘を其中におき、歳時には來りて之を取り用ふ。後縱まに自ら王と稱し、漢は之を認めず。王莽の時には、『漢書』に高句麗と記す高句麗を憎み、高句麗の名稱を改めて下句麗となし、高句麗亦新莽と絶ちて交通せず。後漢光武帝皇帝立つに及び、其の建武七年冬十二月即高句麗大武神王の十四年正式に使を遣して朝貢せしむ。翌年復た朝貢す。光武帝許して其王號を復す。遼東太守蔡彤、武略あり、威遼東を震ふに至りて、鮮卑と共に款を致して此に朝貢す。後歴代支那との交通絶えず。太祖王營立つに至りて國力俄に進み同時に後漢との間、侵寇交戦の事相續いて起る。

されば是は他方（高句麗をして益々）後漢の文化に接觸するの機會を與へしは論なし。~~次~~高句麗の平壤に都を移すに至りても支那文化の輸入は衰へず小獸林王二年には既に太學を立て、子弟を教ふと傳ふ〔三國史記、和漢三才圖繪〕。同年秦符堅、僧順道及佛象佛經を送る。其書を以て子弟に教ふ。是に於て佛教、其の第一歩を半島に印す⁷。（◎上面：◎

梁『高僧傳』は東晋の太元年末僧曇始、經文を費〔=齋〕して單獨に遼東へ入りて熱心に布教し、義熙初年復た關中に還れりとあり。遼東の地、何處なるを知らずと雖、『高僧傳』は曇始の開教を以て句麗聞法の初となし、崔孤雲亦之に従へり。されは高句麗佛法は遼東内領域と鴨綠江邊國都の二ヶ處に發祥地を有す。然るに遼東は燕と高句麗との競争地域となり、干戈絶間なく、小獸林王の三代後、長壽王十五年〔四二七〕には都を平壤に遷したれば、遼東佛教と高句麗佛教との間聯絡に付ては考ふべきなし。小獸林王以後、高句麗に在りて佛法益盛、次王故國壤王九年には下教して人民に佛法を崇信して福を求めよと奨めたり。平原王の朝、僧義淵を齊都鄴に遣して佛教（地論宗、般若宗義）に就て質

問せしむ [海東僧傳]。△→次頁：然るに高句麗は佛教を以て唯一國教と立てず、唐起るに及びては道教をも輸入し之を信奉し、儒・佛・道三教鼎立して行はれしめたり。）

廣開土王・長壽王に至りて土を拓き境域を擴ぐるに廣大にして東夷中の最強者たり。而し支那南北に亘りて交通盛なり。『梁書』に

「東夷之國、朝鮮爲大、得箕子之化、其器物惟有禮樂云。魏時、朝鮮以東、馬韓辰韓之屬、世通中國、自晉過江泛海。東使有高句麗百濟、而宋齊間常通職貢、梁興又有加焉。」

云ふ。(○上面：○『宋書』帝紀夷蠻傳に晋安帝義熙九年高句麗王璉を以て使持節都督營州諸軍事征東將軍高句麗王樂浪公となすとあり、其の晋朝との親善關係を證す。『日本書紀』推古天皇十八年、彼の有名なる高句麗曇徴法定來朝し、徴は諸藝に通し丹青彩色の術に巧に又五經に精通せりとあり。既に高句麗の僧徒か内外兩典に涉りて研究せるを見る。)

唐朝に及びて高句麗益々其文化を慕ひ、唐の尊ぶ所の佛教及道教の書を請ひて之を將來す。榮留王の七年 [高祖武德七年] 請ひて曆を頒ち、又帝道士に命じて元始天尊像及道經を齎して高句麗に赴きて之を講せしむ。又王翌年使を遣して佛教及道教の法を求め、帝之を許す。『舊唐書』に

「高句麗書籍、有五經三史三國史晋陽秋。」と云ふ。案するに晋春陽は『晋春秋』の愆なるへし。『高麗史』宣宗八年戸部尚書李資義・禮部尚書魏繼延の奏に由り宋皇帝に獻せる百廿八種古書目に孫盛『晋春秋』三十三卷とあるものなるへし。又

「高麗俗愛書籍」

と云ふ。以て是國は如何に支那文物輸入に熱心なりしかを知るへし。(△上面：△日本書紀推古天皇十八年) 寶藏王の二年に執政(泉) 蓋蘇文、王に勸めて唐に倣ひて儒・佛・道三教並行せし

め、唐太宗に請ひて道教を求め、道士叔達等八人來りて道教を弘め、王(多く) 僧寺を取りて道觀となす(なし、道士をし(尊ひ) て儒士の上に坐せしめ [三國遺事]、) 是に於て僧侶等、高國を逃れて南方に赴く者あり、佛徒多く望を高句麗に缺く。後高句麗滅亡の時(信誠の如く) 僧徒にして款を敵に通して國を賣る者あり。(△上面：△

蓋蘇文が特に唐に請ひて道教を將來し、教政の根本を三教並行に定めしは、獨り彼自身の支那文化に對する思想を發露するのみならず、又後來朝鮮人の多くの者の懷抱する所となれり即(共通思想を發露す。)朝鮮は支那のあらゆる文物を取入るへきか故に、支那に行はるゝ者の内或一つのみ取りて他を遺すは不充分なり。須らく一切の教を取入れて以て支那のあらゆる模倣者とならざるへからすとすなり。『三國史記』に(蓋) 蘇文の王に告ぐる語に曰く

「三教譬如鼎足、闕一不可。今儒釋並興而道教未盛。非所謂備天下之道術者也。」

恐らく此思想は百濟新羅にも行はれたりしなるへければ、唐代道教の上下の信を博せる、彼の如くなりしかは、道教の本(は) 濟・羅二國にも將來せられしものと見るへきか、但し(百濟・) 新羅には、佛教の名師輩出し、國王亦信佛王輩出(相踵き) しかは、畢竟國教の位地は之を佛教に委し、道教は自由思想として行はれしに過ぎず。→左：但し道教の特に三國中高句麗に盛なるを致せるは後漢書及三國志の高句麗に據るに何れも國中大山深谷多く鬼神を祀るを好むとあり)

既に蓋蘇文、外交政策を誤り、(曩に高句麗か) 隋煬帝・唐太宗の大軍を撃退せる奇蹟の大勝利に誇りて深く自ら驕り、終に唐と新羅の南北挾撃に逢ひて國祚祭らす。而して新羅統三以後、勝國の文獻を保存すること少く、高句麗佛教・儒教・道教皆湮滅して傳らす。惜むへしとなす。

然れど麗末の教政が三教を偏奉せず相鼎立するを許せるは、一見奇異なるか如きも、當時唐の宮廷の三教並尊の状況を觀れば、其の此に出るも怪むに足らず。猶又三教共に支那の最有力なる教として周以來民信を繋ぎ來れるとすれば、皆其々の眞理を有する者と視做すべく、支那文化を學ぶ東國として（唯）其一を取りて他を廢するは必ずしも賢明と（るは、尚支那を學ひて之を盡す者と）謂ふへからず。（△上面：△（『三國史記』）蓋蘇文の王に告ぐる語を録して曰く「三教譬如鼎足、闕一不可。今儒釋並興而道教未盛。非所謂備天下之道術者也。」と、能く彼の中華文化將來の思想を明白に發露すと謂ふへし。）

而して蓋蘇文の三教並尊の思想は、爾後も朝鮮には絶えざる一の思想の流となりて、或は三教調和説となり、或は三教歸一説となり、或は三教採長説となりて思想界信仰界に現出つ。

（上面：三國中獨り高句麗に在りて道教を極尊せる理由に就きては、宋末宣和六年高麗に來れる使徐兢の『高麗圖經』の記する所、一部の據る所なきに非ず。恐らく兢は之を高麗の博識より傳聞けるならん。

「高麗地濱東海、當與道山仙道、相距不遠。其民非不知向慕長生久視之教、第中原前此、多事征討、無以情淨無爲之道化之者。唐朝之興、尊事混元始祖、故武德間、高麗遣使、自請道士至彼講五千文、開釋玄微。高祖神堯奇之、悉請從其請。自是之後、始崇道教、踰於釋典矣。」

高麗、大川名山に富み、古來支那に在りて神仙方術の發祥なる山東と同しく東海に濱す。原始的に鬼神を信し、實に道教有縁の地なり。然れど蓋蘇文の道教を請へるは、李唐高祖の老子特尊道教信奉の事、此にも聞え、一には支那の尚ひ支那に流行する所の教を取入れんとする文化輸入の熱心と、他には何分か由りて以て唐朝の好感情を博せんとする事大主義とに原因す

と視做すへし。）

〔二〕百濟

百濟は即元と馬韓の地。馬韓は三韓中尤強大にして支那文化に接すること最早し。是れ『後漢書』に

「三韓之諸國王、先皆馬韓種人焉。」

と云ひ、金富軾の『三國史記』に

「辰韓、常用馬韓人爲王。雖世々相承而不得自立、常制於馬韓。」

と云ふ所以なり。されば馬韓と支那との交通は、『三國志』には晋武帝咸寧三年既に馬韓主、使を遣して朝貢すと記す。後、百濟王國と稱するに至りては第一次朝貢の史乘にあるするは『晋書』に簡文武帝咸安二年、百濟王使を遣して方物を貢すとあるもの是なり。高句麗、前漢時代より既に支那と交通ありしに比すれば約四百年後。是れ陸續なる高句麗と、海を横きりての百濟の交通との難易より來る結果なり。但し百濟に既に（支那）文化の將來せられしは、樂浪・帶方時代に洩るへければ、漢籍の傳りしも頗る上代に在るへし。

古爾王の五十二年（は）（晋武帝太康二年（にして）帶方郡猶存す。）（此年）王仁、我國に來朝して『論語』『千字文』を獻し、其前年阿直岐、來朝して儒經を皇子稚郎子に教へしに徴すへし。⁸

爾後歷代支那との交通絶えず、近肖古王廿九年〔晋簡文帝咸安二年〕使を遣して晋に朝貢せしめ其卅（其卅）年には博士高興なる者を得、國の書記を作るを得たり。『三國史記』には（此を録して）百濟は開國以來未だ文字記事あらずと云ふ（ひ、更に）附記して高興の何許人なるを知らずと云ふ。恐らく彼は支那人なるべく、百濟の國の記録あるは高興に始るとなすへし。

又『三國史』百濟本紀には高句麗故國原王の百濟を犯すや、近肖古王太子を遣して之を防か

しめ、半乞壤に至り、進撃して大に之を破り、北くるを追ひて水谷城の西北に到る。將軍莫古解、諫めて曰く

「嘗聞道家之言、知足不辱、知止不殆。今所得多矣、何必求多。」

と。太子、之に従て止むとあり、當時老子書か道教の既に百濟に入れるを見る。

枕流王の元年〔東晋孝武帝太元九年〕使を遣して晋に朝貢し、胡僧摩羅難陀、晋より來りて佛法を説き、百濟の佛教茲に始まり、王始めて太學を立て律令を頒つ。毘有王の廿四年〔唐文帝元嘉二十七年〕使を遣して宋に朝貢せしめ、易林式占と腰弩とを求得て歸る。聖王は百濟（王）中卓逸せる文化に功ある王なり。梁武帝に倣て大に佛教を外護し、且つ進て日本に迄佛法を傳へたり。其の十九年には梁に使を遣して朝貢し、兼て毛詩博士と涅槃等佛經の經義及工匠・畫師を表請して之を得たり。法王は博士李文眞に命して始めて國史を撰修せしむ。（◎上面：◎其の卅五年には唐太宗に請ひて高句麗・新羅僧と共に百濟僧の中國に入りて佛法を學ぶを許さる。）武王の四十一年〔唐貞觀十五年〕には子弟を遣して國學に入らしめ、唐文物を輸入するに銳意す。

國末に至り新羅親唐の外交の成功に伴て（◇左脇：◇漸く日本に頼ることりて新羅を壓し高句麗を防くに專となり）、唐との關係漸く疎乖し遂に唐新羅の聯合軍の爲に國破れ、日本の援軍亦白江村に大破し、社稷血食せず。

百濟滅後、其の文化は新羅に如何なる影響を與へしか、今文獻滅ひて徴する能はず。（△上面：△百濟の文化殊に佛教及美術の方面は朝鮮の史料徴すへきもの甚少し、寧ろ日本の古記に之を録するもの甚多し。百濟の文化を究めんとする者は必ず日本古史録をさぐらさるへからす。）

第二章 新羅文化

新羅開化の三國中最後のは（れしは）地理的關係上已むを得ざる所なり。新羅の支那との交通の開けしは、『資治通鑑』に東晋孝武帝太元二年、高句麗新羅西南夷皆秦に入貢すとあるものにして、『晋書』には符堅の建元十八年壬午に新羅王棲寒、使を遣して美女を貢すとあり。（◎上面：◎『三國史記』（にも）奈勿王廿六年、乘頭を遣して符秦に入りて方物を貢せしむとあり。）案するに、符堅は頗る朝鮮半島の開教に意を用ひ、前に高句麗小獸林王二年には僧經像を高句麗に送りて半島に佛教の第一聲を擧げしめたり（基を開きたり）。

新羅か高句麗を通して前秦の文化を聞き使節を遣せるは、事の宜しき所なり。爾後（久しく）新羅の支那への朝貢絶えて史乘に記載あらず。北魏の宣武帝景明三年壬午に至りて智證王、使を遣して朝貢し、次て永平元年戊子復た使を遣す。既にして梁武帝南朝を立て文化大に進むに至りて、新羅開化主義の王法興王亦遙に之を慕ひ、梁の普通二年辛丑、使を遣して梁に朝貢せしむ。但し是時は新羅の南支那に使節を派する第一次なるか故に自ら達する能はず、百濟使節に隨て始めて梁に到るを得たり。

之より先き佛教既に高句麗より（僧によりて）新羅に秘密に布教せられしか、國法之を禁す。法興王始めて之か公行を許す。今や新羅と梁との交通開くるに至りて直接南方の（佛教）諸宗持來さる（此に將來せられ）（◎上面：◎眞興王七年には國史を修し、）~~眞興王~~十年には梁、使を遣して入學僧覺徳と佛舍利とを新羅に送り、新羅佛教の宣敷を勸奨す。

既にして新羅の國力漸く（内に）充實して領域發展の機運到る。『日本書紀』には（據れは）欽明天皇の十二年に百濟聖明王親ら其國軍及新羅任那の二國の衆を帥ひきゆて高麗を伐ち漢城の地を

得、亦軍を進めて平壤を撃ち六部の地を回復すとあり、翌年百濟漢城~~と~~と平壤とを捨て新羅之に因りて漢城に居る⁹とあり、『三國史記』には（據れば）其翌年欽明天皇十四年〔眞興王十四年〕秋七月百濟の東北鄙を取りて新州を置く~~とあり~~、其十六年には王北漢山州に巡幸して封疆を拓定し、十八年には新州を廢して北漢山州をおく。（~~とあり平壤を取るの事信すへからざるも三國史の記事疑なし~~）（◎上面：◎日本書紀の平壤は南平壤を謂ふなり。漢城と南平壤と同一域なるを知らず別書せるなり〔文獻備考（輿）地理考〕斯くて新羅は高句麗・百濟に代りて漢江流域・臨津流域の地方を支配するに至る。）

新羅か百濟の東北部を取りて北漢山州をおきしは、新羅文化發達に一時期を劃する者にして、之より新羅は自由に黃海を横斷（航）して支那と交通するを便宜を得。爾來陳及隋と交通頻繁となり、特に入學僧の往還相望み、新羅佛教急速に發達をなし、支那に於ける諸宗派續々として輸入せられ、同時に新羅は、必ず支那と結びて其の援助を得るに非されは、半島經略三國統一の大業成就すること難し。故に新羅は何物を犠牲にすとも支那に對して三國中最高親善の關係を締結せざるへからずとなす（所の）新羅の最高國策の確定を見。爾後歷代國王、相承けて其實現に努力し、同時に内には國民の志氣揚り武勇を磨き、宛然日本武士の如き氣象を以て、名將金庾信を総帥に仰き北の高句麗、西の百濟に當り常に（能く）以寡敵衆（し）、外は（國交）使臣を（國を代表して）支那に派遣（駐在）して深く宮廷に迄喰入り遂に皇帝をして親羅主義の人たらしめし金春秋・金法敏・金仁問・良圖・海喰（等の才人）あり、内外相應して終に最東方に偏在し最文化に後れし國を以て三國統一の大業を成就するに至れり。されは新羅の文物は、其の眞興王朝北漢山州を百濟より取りて支那との航港口を得たる時を以て飛躍的に發達の途に

進めりと謂ふへし。

新羅に支那文物の將來に由り、儒・佛・道三教か漢學と云ふ形式に由りて新羅に入來りしは、想像するに難からざるも、今殘存する文獻には佛教の發達の盛況を物語るもの獨り豊富にして、他二教に於ては甚貧弱なり。是れ當士人の儒學傳習の熱心よりも僧侶の傳法の誠勝るか故に、其の學問一般に在りても僧侶に讓る所ありしに因るなるへし。

例へは、眞平王十一年遣はされて廿三年に還國せる留學僧圓光は當時實に政治に在りても王の顧問の如き位地¹⁰に在りて、高句麗の屢次封疆を犯すを苦みて隋に兵を乞ひて之に當らんと欲し、其の此の重大なる請表は實に圓光の手に由りて撰せられたり。斯の如くなるか故に、新羅の士流の學問を以て身を立てるとするや、佛に往かされは則儒に往き、明に士流立身に二途あるに至れるは、『三國史記』任強首列傳に

「及壯自知讀書、通曉義理。父欲觀其志、問曰、爾學佛乎、學儒乎。對曰、愚聞之、佛世外教也。愚人¹¹間人¹²也、安用學佛爲。願學儒者之道。父曰、從爾所好。遂就師、讀孝經曲禮爾雅文選。」

とあるに徴すへし。されは新羅の

然れども、儒教は漢學一般の根本思想を成し、漢學の傳來し支那文化の取入れらるゝに從て、當然最初に新羅人に受用せらるへき思想信仰なるも（なるか故に△→上面：△支那との交通の頻繁となるに從て益々發達し、終に唐太宗、外征業成り諸夷服するに當り、貞觀十三年大學學舎を千二百區に増築し、高麗・百濟・新羅・高昌・吐蕃相繼て子弟を遣して入學せしめ、大學々生數八千餘人に達するや、其餘風亦新羅に及ひて新羅の漢學振作の時期に入り、儒教の教義文獻、國民に普及し、既にして三國統一業成るや、神文王二年國學を興し、其の制度課程、略唐制に則り文運斐然として盛なり。然れども）元來儒の教は人間の自然の倫常に順應して最中庸の穩健

毫も他奇なきか故に、其か人間社會の道德・政治の軌範を與へ、~~又支那文學としての方面より文章の詩歌忽にして~~（能く）新羅人の道德及政治思想を統制し、~~又從て官吏治者の必修の學問となり官吏登用資格と結付き、既にして學校設立せらるゝに及びて~~國家の教育の内容形式、皆儒教の立つる所に準據するに至りて而して（れるも）、顧みて尚新羅人の（生前死後）現在及未來に向て~~欲求~~（有）する強き功利的及非功利的、國家的及個人的欲求をは是に依りて満足せしむるには足らず。

換言すれば、儒教は尚新羅人の（高遠なる~~形而上的~~教理及感應の對象を要求する）宗教意識の充足を與ふるには足らず、依然彼等は古來の宗教なる巫覡及天象祖先崇拜に依りて其の信仰對象を與へらるに止まれり。是に於て一朝佛教、法興王に由りて公行を許さる（れ、爾後歷代~~益々~~逐年大小乘諸宗教義普及せらるゝ）に至りて始めて、新羅人は深き内容を（ある教理を）有して禳災招福の法力に溢るゝ偉大なる宗教に接し、此に新羅人の思想信仰に大なる新しき内容を與ふるに至れり。（◎上面：◎百濟の聖王の日本に佛像經文を獻する上表に、佛の諸法中、最殊勝最難解難入、周公孔子も尚知る能はざる所と云へるは、能く三國人の儒佛二教の批判を明白に顯せり。）故に新羅の思想史は佛教の流行に至りて忽然として飛躍的に（内容豊富に~~シテ~~信念深き）新時代に入る。

第三章 新羅の佛教

（次頁上面：『三國遺事』は、法興王十五年の前百十~~二~~（餘）年訥祇王元年（時）墨胡子~~一名~~我道なる僧、高句麗人を以て（より）新羅（一善郡）に來りて秘密に布教を開始して後往く所を知らず。毘處王の時、我道和尚なる者一善郡に來りて布教し數年に~~シテ~~無疾~~シテ~~歿し、其從者三人

留住して經律を講讀し往々信する者ありとす。『海東高僧傳』は朴寅亮の『殊異傳』を按して我道の傳を載せ、其來羅を味鄒王の二年となす。則訥祇王に先たつこと更に百年なり。而~~シテ~~『海東高僧傳』は別に又「古記」を引きて、高句麗の阿道の法興王十四年一善郡の信士毛禮の家に到るや、禮驚愕~~シテ~~

「曩者、高麗僧正方來入、我國君臣怪爲不祥、議而殺之。又有滅垢玼、從彼復來殺戮如前。汝何求而來耶。」

と云て密室に匿住せれば、其内に吳使五香を以て獻す。朝廷其の用法を知らず遍く國中に探て、阿道乃ち其用法を説き、王御感^{ななめ}斜ならず、此に佛法公行の基開くとす。

此の所謂古記は何人の手に成れるかを知らず。文中注意すへきは、曩に高麗僧二人二回に來りて共に殉教するを記す事、是也。『海東高僧傳』は又別に訥祇王時墨胡子來り、毘處王の時阿道和尚復至ると記すること『史記』『遺事』ともし。是は『史記』の注によれば、新羅金大問の「雞林雜傳」に基くと云ふ。

斯くて新羅に初めて佛教の入りし年代に就ては、最古き朴寅亮→挿入文の左→『殊異傳』の味鄒王二年〔二六三〕あり、次には『史記』『遺事』『高僧傳』の訥祇王期〔四一七～四五七〕あり、「古記」の所謂高麗僧及滅垢玼の殉教年代は詳ならず。而~~シテ~~阿道の來羅につきても『殊異傳』は味鄒王二年となし、『史記』『高僧傳』は毘處王の時となし、「古記」は法興王十四年となす。獨り『遺事』は墨胡子と阿道とは同一人なるのみならず、彼の高句麗小獸林王五年王か伊佛蘭寺を創めて順道と共に此における阿道とも同一人となす。

◎→次々頁上面：◎其來羅の年代を訥祇王朝となす。案するに墨胡子・阿道を同一人となすは、訥祇王・毘處王と明瞭に區別する古傳に反し、斯くも長年生存するは不可能也。二人者儀表相似たりと云ふは、僧形なるか爲なるへし。且又前述

『高僧〔傳〕』の引用せる「古記」に法興王佛法公行前高麗二僧來りて皆殉教すとあるは、是の墨胡子・阿道の二人か果て殺されしか否か徴憑すべからずと雖、兎に角、法興王行佛前に高句麗より前後二僧來りし點に於て相合す。『高僧傳』は又一説として高得相の詩史を引きて

「阿道再遭斬害、神通不死、隱毛禮家。」

と記し、墨胡子も阿道も皆同一阿道其人にして共に殺されしも神通を以て死せず、三度目に法興王の十四年に現れて終に使命を果せりとなす。以上を綜合して予は、新羅に在りては、法興王十五年行法前、高句麗小獸林王二年行法の後四十餘年訥祇王の頃、既に高句麗より僧侶の來れるありしか、佛法未だ行はるゝに及はずして死し、次て毘處王の時復高句麗より阿道なる者來りしか、亦佛教一般に行はるゝに及はずして死し、法興王に至りて始めて公行す。而して是時高句麗僧亦阿道と呼へり。是即崔致遠の「智證國師碑文」に

「句驪阿度々于羅如康會南行。」

となす所以也。而して何故に新羅に斯の如く我道の僧名多きか。若し當時僧を呼ひて~~や~~とせざるならば、頗る妙なるも今放なし。斯く解て始めて『史記』所載法興王十五年群臣か王の行法に反對する語中に

「今見僧徒、童頭黒服、議論奇詭而非常道。今若縦之、恐有後悔。臣等雖即重罪、不放奉詔。」とありて、彼等か既に僧侶を見、佛法の議論を聴きし事實を了解すへし。然則、訥祇王・毘處王朝二回、勇猛なる高句麗僧來りて布教を試みて共に成らず恐く殉教の最期を遂げしか、尚佛法種子遂に新羅に亡びず民間往々之の私奉する者あり、王の皈依を得て始めて公許教法となり、漸く以て國教となるとなすへし。）

新羅佛期は之を四期に分ちて觀るを得へし。第一期は、所謂黎明期にして始めて佛教か新羅人に（公然）紹介せられて其の布教を開始し福音

を弘布する時期也。第二期は、傑出せる僧徒の（巧なる）方便説に由りて佛教と新羅人の~~在來~~宗固有思想との融會を成し始めて佛教名實共に新羅の國教たるに至れる時期也。第三期は、佛教々理の發達其の頂に達し、（實）大乘の諸宗の樹立を見し（時）期なり。第四期は、佛教宗派の最力的にして最知識階級の在家者にも玩味し信奉する門戸を開ける禪宗の興隆せる時期なり。以下各時期に亘りて其の概要を述へる。

〔一〕 1 第一期根本佛土説

法興王の以前既に高句麗の（勇敢なる）法師に由りて秘密に佛教か新羅に布教せられしは、（『三國史記』『三國遺事』『海東高僧傳』の記する所ありて疑ふべからず。故に安順菴は『東史綱目』附卷上考異新羅始行佛法の項に

「新羅佛法之行、雖在是年、而炤智王時、有焚修僧、則前已有佛矣。且慈悲炤智等號、皆有佛語。蓋佛法雖存而一國信奉、從此始也。」

と云へるは、亦是意に外ならず。而して法興王は何か故に佛法を公行せんとし、當時朝廷の臣下の大部分は如何に王の意見に對して如何に思へるか。（今『史記』『遺事』『高僧傳』△上面：△共に金大問〔聖德王時人〕の「雞林雜傳」に從へば明記する所なし）。

案するに當時高句麗・百濟の二國は既に佛教を行ひ（ふつ）久しく、又南朝梁武帝は稀有なる信佛天子にして法燈を高揚するに惟れ日も足らず、（佛教は）支那文化を重要なる部分となれり。開化主義を抱持する法興王か己の國にも之を行はんとするは、洵に宜なり。然るに當時の廷臣は其の異國の法（にして荒誕）なる佛法を行へば、堂塔の建立に由りて國帑を糜すへきか故に止むるに如かずと反對し、此に異次頓の殉教的（受）刑に由りて廟議一決せるなり。

然るに更に進みて法興王其人の佛教に對する個人的信仰を攷察するに、彼は一般王者と同じ

く佛法を以て國祚擁護の法力あるものにして、三國對峙し互に國運興敗を争ふの秋、是教を奉して以て佛加護を得、他日の大業を成就せんと念願せるか如し。其は王と時を同うする百濟の聖王か其卅年、日本欽明天皇に佛像經卷を貢するや上表して

「是法、諸法中、最爲殊勝、難解難入。周公孔子、尚不能知。此法能生、無量無邊、福法果報、乃至成辨、無上菩提。譬如人懷隨意寶逐所須用盡依情。[日本書紀]」
と云て之を奨めたり。

今残存する慶州栢栗寺六面石幢は推定新羅憲德王十年戊戌の建立にして多く滲漫して判讀すへからさるも、猷燭の頸の切口より白乳天に噴進し、虫虵迄昇天するの繪一部と王と猷燭との問答に

「□天下佛教流行□動之類□□□國豐民安可通三韓□□四海。[金石總覽]」

の一行は、臆氣なから讀むへし。是は、更に後世に至り大に發展せる佛法と國家との關係を緊締せる思想にして、新羅君臣か一度斯く佛教を奉せる以上、極崇極尊に到らされは已まざる所以、實に此に存す。

法興王、佛教を公行し、次王眞興王一層之を熱信す。末年剃髮僧衣を披し自ら法雲と號し、妃亦尼となる。斯の如く新羅佛教、逐年宮廷大臣の家庭に浸潤すと雖、尚都鄙庶民の心中には此を以て異國の教にして自國固有の神祇の崇拜・祝釐と別教なるか故に、之を信するは反りて國神及祖先の靈の不満足を買ふ所以ならずやと畏れ、不安を感じる反佛意識の存在するを免れず。従て村々里々を教化して眞の國教となさんには更に又善巧方便を運らさるへからず。

而して此の佛教(普及)當局(面)の重要問題を工に解決せるは、彼の善徳王朝の慈藏大徳其人なるか如し。彼に至りて初めて新羅に在りて日本の本地垂迹説に似たる根本佛(土)説

の唱出されしを見る。

慈藏は王族なり。善徳王五年入唐し(太宗の許可を得)終南山雲際寺の小庵に入り(道宣の)律宗を受學す。貞觀十七年還り大に王の皈依を得、大國統に任せられ、戒律を規定し、大に僧尼の紀綱を肅振(正)す。梁山通度寺に金剛戒壇を築きて(僧俗)萬民の爲に授戒す。(國中尊稱して菩薩と曰ふ。)

根本佛土説は、本地垂迹説と立説の本意を同しうして、其の對象及説方を異にす。本地垂迹説は奈良朝に起りて盧舎那佛と天照皇大神とを一本同體と立てたるに、根本佛土説は、國情日本と異なり、國民思想中心對象を缺くか故に、單に朝鮮なる國土殊に新羅の領有する東海岸一帯、北金剛山より南慶州に至る地を以て、前佛時代の佛淨土たりし者、中頃一時佛法絶えて今再度新羅の手に由りて興されんとすと説くなり。故に之を稱して根本佛土説と謂ふへし。されども、其の本來佛法の行はるへき因縁を有する國土なりとなす本意に至りては日本垂迹説と擇ふ所なし。

是説、國王の崇敬する尊き大僧正の口より物々しく説演せらるゝは、無知なる庶民の信受するは勿論、同時に(從來)佛教を以て外來異教と惟へる觀念を轉(翻)して、今佛教を奉するは即故國の舊教に復歸するに外ならずと信じ做すに至り、此に佛教と一般民心との間の乖隔撤せられて眞の融會を致す。

(上面：按するに、根本佛土説の思想の佛典に現はるゝや、其來ること甚悠遠なり。而して大別之を二類に別つを得へし。

其の一は、『舊譯華嚴經』第二十九菩薩住處品、『新譯華嚴經』第四十五諸佛菩薩住處品、『大集經』第四十五護塔品に東西南北の諸處名山に過去佛時代より絶えず、佛菩薩在住して衆の眷屬と共に説法し、今猶現に特定の場所に特定の佛菩薩在して説法すとなすなり。例へは、海中に山あり金剛山と稱し、昔より已來諸の菩薩衆は中に

於て法を演説止住し、現に菩薩あり名けて法起と曰ひ、其の眷屬の諸の菩薩衆千二百人と共に常に其の中に在りて法を演説す。又震旦國に一の住處あり那羅延窟と曰ひ、昔より已來菩薩衆は中に於て止住せり〔新譯華嚴〕とあるか如し。而して斯の如き根本佛土説は現在佛教盛に行はれつゝある地方の根本佛縁を説きて益々民信を深からしむるに最効力あり。

其の第二は、即昔時過去佛時代に一度佛教流行せるか、中頃絶えて今日に及ぶ。但し其の土地の名若くは~~山土遺蹟出土品等~~に由りて昔時の佛教の盛況を想像するを得へしとなすもの。例へは~~高僧傳佛祖統記摩騰竺蘭の記事の如し。此は現に佛教尚行はれず。此より此に引めんとする土地に於て尤効驗あり。新羅の慈藏の學へるは則第二の根本佛土説なり~~『大方等大集經』日藏分護塔品に

「佛言如是橋陳如。此四天下有大支提聖人住處。若有衆生、精勤方便坐禪正慧、當知此處則爲不空。如是福地、則爲流布、日藏法寶。何者、名爲大支提處。此閻浮提門王舍城中聖人處所。大支提者、乃是過去無量如來、無量菩薩、無量緣覺、無量聲聞。曾於其中修道減度、今悉現有當來亦然。過去諸佛菩薩聖人、皆以付授娑婁那龍、令使擁護住持安立我今、亦欲令此處所光明久住還、以付囑娑婁那龍。若有衆生、能護我法、精勤方便坐禪正慧、諸富伽羅、應當守護供給供養。」

此方便説を實地に應用せる者に後漢明帝時、初來沙門摩騰竺蘭あり。『佛祖統記』曰く〔印無、中斷〕

（上面右脇：「又制多、聚諸室乃石所造、又有塔婆、佛法之靈處也。」）

『三國遺事』に記する所の皇龍寺九層塔・五臺山五萬眞身・皇龍寺丈六に於て慈藏大師か或は新羅王を以て（原と）天竺利利種なりと云ひ、或は江陵の五臺山は支那五臺山と同格にして各臺に一萬の眞身文殊常住説法すと云ひ、或は皇龍寺は釋迦と迦葉と宴坐講演せる地なりと云ひ¹¹、何れも新羅か遠き前代に在りて既に佛土たりしを説くと解すへし。慈藏一度之を唱道してより、新羅僧侶之を踵く者多し。彼の金剛山楡岾寺の五十三佛縁起、梁山靈鷲山の縁起、我道

本碑に於る我道の母の豫言¹²佛國寺縁起等に於て皆其々の逸名時代不明の作者に由りて新羅の根本佛（土）國たることを高調せられたり。今朝鮮の山名、佛法に縁ある者頗る多し。其の或物は（其の）命名亦是説に出て今日尚當時佛徒の巧方便を傳ふと視做すへし。

根本佛土説の勢力、後世に至る迄衰へず、彼の北朝鮮（方山地の）傳説たる始祖檀君を以て帝釋の庶子の子なりとなす『三國遺事』の所傳も同じく是れ根本佛土説なり。高麗太祖をして全國に五百の禪林を建てしめしも、亦我道本碑佛國寺縁起に載する所の前佛時五百禪林説に依れるなり。又高麗仁宗朝妙清か平壤に林原宮を設くるや、鮮内（八）主岳の（主なる）神仙は其の實（夫々）印度に於ける八大菩薩に外ならずと説けるも、亦是説の圈裡に入るへし。（△上面：△

但し本説も新羅僧侶の創思に出づるには非ず。遠く上代に在りて既に佛徒に由りて巧妙なる佛法弘布手段として説出されしを見る。『佛祖統記』に漢永平年間佛法渡來の事を記して摩騰竺蘭始めて佛法を中国に傳ふる事を記して

「明帝永平十年、摩騰竺蘭、達雒陽。十一年、勅城西雍門外立白馬寺。十四年、帝常幸白馬寺。摩騰進曰、寺東何館也。帝曰、昔有阜夷之復起有光怪、民呼聖塚。騰曰、昔阿育王（建）藏佛舍利八萬四千方、震旦之境有十九處、此其一也。帝大驚、即與俱往禮拜見、圓光涌塔上、光中有三佛。侍衛觀呼指稱萬歲。帝大悅曰、不有二大師、焉知大聖遺祐哉。乃詔造塔其上、高九層二百尺。明年有光見于塔、有金色手出塔頂、天香郁然。帝駕幸瞻禮、光隨步武。」

と云ふ。事の實否之を今徴すへきなしと雖、僧侶の布教手段としては相應しく、若し假りに摩騰果~~此~~此の説を出さしとするも、中国僧侶の之を唱出して以て方便となせること疑ふへからず。）

斯くて慈藏の根本佛土説は大に新羅上下の（皈依）佛を誘導して爾來一層速に教法弘宣するに至れること疑ふへからず。故に彼か夫に南山道宣の律宗を將來し、授戒官壇を起し、僧紀を起し振肅正し、新羅の僧風をして頓に一變せしめし事業と相俟ちて新羅佛教は慈藏に至りて第二期に入る。

二 元曉、義相

新羅佛教傳來以來、支那に於て行はるゝ（各）宗派を輸入し諸宗對立の盛觀を呈せりと雖、崔致遠の「智證國師碑銘」に據るに、初に小乗有部宗將來せられ（上面：小乗先來）、其後支那に在りて大乘諸宗の漸く成立するに従て亦大乘魔訶衍の輸入せられしを見る。

大乘佛教の新羅に入りしは、日本推古天皇の卅三年に高句麗の慧灌（三論宗を傳へ）、~~及貞觀~~初（推古の十）年に百濟の慧現（觀勒）亦三論を傳へしに由りて晩くも新羅にも既に隋末唐初には大乘の一派新羅にも入れるなるへし。然れど實大乘の教界を風靡するは元曉・義相の二大師か華嚴宗を打樹てしに始まる。

而して元曉か終に入唐の素志を遂げさるも能く八宗を兼學し各宗の（重要）經論に殆と疏義を施さるなきは、其の絶大なる天才に由ると雖、實に當時既に新羅及百濟の地に大小乘諸宗盛に弘布し、夫々の學匠、~~幡~~（刹竿）を樹てゝ説法せる者ありしに就て遍學せるか爲なり。元曉は佛教傳來以來の南方佛學の知識を集成せるものなり。

（古來）元曉・義相と並稱して例として元曉を前におく。元曉か義相に比して稍や先輩なるか故也。二師は新羅統三の盛時に出てゝ能く大乘教理を丕闡して新羅佛教後來大發達の基礎をおけり。故に金富軾「大覺國師碑文」にも

「佛法、以梁大通元年丁未肇入新羅、後一百餘年、義湘元曉作。」

と云へり。二師事蹟は『高僧傳』『三國遺事』『會玄記』に出てゝ外に鮮僧の手に成れる者少からず¹³。大正三年（五月）慶州東面暗谷里の溪中より發見せられし「高仙寺誓幢和上塔碑」の斷碑は讀むへき文字多からさるも亦新事實を提供せり。誓幢は（『三國遺事』には）元曉〔初〔?〕の名なり〕。

元曉、姓薛氏〔遺事曰、初名誓幢〕、尚州の人、眞平王卅九年生れ、神文王六年三月卅日寂す。享年七十。艸年佛門に入り、雋逸無比、三學を淹貫す。嘗て義湘と共に入唐の志を起し、遼東に到りて果さず。既にして心性の理（一心萬法の理）に就て豁然頓悟し爾來罣碍なく、自ら小性居士〔遺事作ト性〕と稱し、任運騰々遊戯三昧の生活に入り、時ありて諸經論に施註し、時ありて琴を撫して樂む。

後世或は元曉か太宗の爲に將軍となりて統三大業に參劃すとすこと（し）、高誠（麗）の誠心、百濟の朱琛と三傑鼎立せりと傳ふ¹⁴。「誓幢和上碑文」に

「□□還爲居士、淡海之□、溟東相府、匡國匡家、允文允□。□□□□。」

とありて、或は其の事實ありしに非ずやと思はるれど、尚確證なきを遺憾とす。（△上面：△又誓幢和上なる名稱か既に軍職に關係あり。即『三國史記』職官志武官に九誓幢~~一曰録衿誓幢。眞平王五年始置。但~~ありて九箇の團體の衿色を異にする者より成り廣大なる組織なり。

誓とは停の羅語營なる如く、又恐く兵營軍鎮なるへきは菁州誓・漢山州誓・完山州誓等あるに（ありて）此の誓に小監・大戸等見る~~へし~~の軍職をおかれしに見るへし。）¹⁵彼か王の公主に尚して薛聰を生めるは史證ありて疑ふへからず。

（×左脇：×誓幢和上斷碑には「大師德惟宿植道□生知因心自悟學□〔慈無〕僧師」と云へども）

元曉¹⁶の學統に付て大覺國師には（義相と共に平壤盤龍山より）避難し來れる高句麗の學僧普

徳和尚に従て涅槃・方等を受け、(又傳に曰く) 求禮華嚴寺縁起の傳なる祖師烟起法師は其華嚴の師なりと。彼は當時所傳の各宗の經論殆と疏註を施さゝさるなし。(今◎上面：◎大覺國師の『新編教藏総録』、日本興國寺沙門永超の『東域傳燈(目)録』、『諸宗章疏録』、『増補諸宗章疏録』によれば〔石田茂作氏の寫經より觀たる奈良朝佛教研究には六十種に上る〕約五十三種あり、其の中最大作に推すへきは華嚴疏なるか如きも今見るに及はず。

元曉は其浩大なる經論の疏註を通して其名支那に迄流傳し其華嚴疏は海東疏と稱して支那の學僧に讀まる。又李通玄か『華嚴合論』を著すや、其序文に於て古來の判教者を通叙し、其七者として元曉の判教を説けり。元曉は各宗教義に通曉して漏すなしと雖、其の奉する所の宗派は義相と同しく華嚴宗なること、彼の華嚴(判教及) 晋譯華嚴經疏序〔東文選〕等に依りて疑ふへからず。高麗肅宗王、和諍國師を追贈す。彼か『十門和諍論』を著して當時華嚴學界の論争を(和) 靖せるか爲也〔誓幢碑〕。其論、今傳はらず。

〔義相〕

元曉か八宗兼學の眼を以て華嚴一宗を最上乘と立てし同時代に義相¹⁷は入唐して親しく華嚴第二祖知儼和尚に終南山至相寺に従學し、其の教學を悉して歸り、華嚴宗を標榜して(海東華嚴初祖となり) 終に新羅教界の大勢力となれり。

義相又義湘、義想とも書す。姓は金氏、或は曰く朴氏と。新羅の名門の出なり。眞平王四十二年生る。蚤歳剃髮し、永徽元年法兄元曉と共に高句麗に至りしか、遼東途杜かりて通せず空しく還る。龍朔元年獨り搭舶、山東の登州に達す。華嚴二祖知儼に師事し、同門賢首大師法藏と並ひて儼門雙龍象の稱あり留まる^{二十年}、咸亨元年學成りて還る。父武王、大に尊崇を加へ其の十六年爲に太白山下に浮石寺を創む。後賢

首大師『華嚴探玄記』〔于時兩卷未成〕其他の著書成るや、恰も還國勝詮法師に託(托)して之を贈り、以て斯宗を海東に弘めることを託す。彼の開基し又は重興して華嚴を説きし者十餘り。寺或は曰く

「中岳公山美理寺、南岳智異山華嚴寺、北岳浮石寺、~~康州~~迦伽山海印寺、同普光寺、熊州迦伽峽普願寺、鷄龍山岬寺、金井山梵魚寺、琵琶山玉泉寺、全州母上國神寺、漢州負兒山青潭寺。」是なりと。

朝鮮華嚴宗は之より前、元曉か一乘滿教と判斷し(華嚴教を以て) 唯佛與佛の究明する所となせしありと雖、義相の正統的將來を以て名實具備する本宗の開宗となし、彼を以て海東華嚴初祖となす。彼居常精勤淨行具さに到り、門徒を導くに至懇、弟子大に振ふ。著する所、『道心章』『錐穴問答』を首とし、『阿彌陀經』『華嚴經』に關する者數種ありしも、今は『華嚴一乘法界圖』〔續藏華嚴部〕及『白花道場發願文』の外、傳はらず。

元曉・義相二師出る迄の新羅は、小乗は勿論三論・涅槃及律宗の如き諸大乘宗既に開宗せられ、殊に慈藏法師の律宗は優勢を占め、諸所に(授戒) 官壇を設けて(僧) 俗に授戒し、僧界の紀綱一振せり。然れども尚未た佛教々理發達の最頂に達せる現象即實在、煩悩即涅槃の教義を説く所の所謂一乘滿教の成立を見ず。

二師の出現に由りて元曉は佛教經典を流暢に新羅語に譯(演)して一般に一乘妙理を理解せしめ、義相は唐土の斯宗を繼いで既に彼土に在りて大名を馳せ、還りて國王の皈依を博し高く法幢を樹てゝ玄妙を弘演し門下に數多龍象を打出し、圓宗始めて大に盛、終に三論・律の如き在來宗派を凌駕して新羅佛教の盟主となり、以て禪宗の傳來に迄及へり。要するに、二師の力に由りて新羅人は始めて(其) 理智を満足せしむる教法を見出しゝ事、疑ふへからず。

而して此時一度樹立てられて朝鮮人に由りて最乗(圓)滿宗教なりと信認せられしより爾來、本宗は羅・麗・李三代を一貫して朝鮮佛教諸宗中最優勢の宗派となり、殆ど他幾多の所謂教宗を代表する者となり、以て今日に至る。

三 新羅の禪宗

新羅の禪宗¹⁸は其の將來時代、他大小乘諸宗より晚れたりと雖、一度宣布を始むるや忽にして上下の信奉皈依を博し、名僧輩出し、傳燈整然として源流尋ぬべく本末紊れず、其事蹟の傳はるもの、優に他宗全部を併せたるより饒し。新羅禪宗の始祖に就きては種々の傳ありと雖、羅末の文豪崔致遠の撰に係る諸碑銘は最信すべし。就中天復年奉教撰せる智證^{智證}(大)師の碑文には新羅禪宗の歴史を述ふること頗る詳細なり。之に據れば、智證國師の師は慧隱、々の師遵範、々の師慎行[又神行]、行の師法朗、々の師雙峰、々は即禪宗第四祖大醫道信なり[道信は唐高宗永徽二即新羅眞德女王の二年寂す]。法朗還りて踰踞山(上面：踰踞山所在不明)に閑居す。然るに時運未だ到らず、唯た法を慎行禪師に付與して逝き、禪宗尚行はるゝに及はずと云ふ。然らば則新羅禪宗の始祖は法朗禪師其人なりとなすべく、時は方に統三頃に在り。朗[の]事蹟今傳はらず、四傳して智證^{智證}(大)師に至り、法流(初めて)大に盛なるを得たり。降りて長慶の初[憲康(德)王朝八二一~八二四]僧道義[又道儀]西堂の法を嗣き還りて法幢を雪岳[江原道]陳田寺に樹てしか、亦大に弘通するに至らず、廉居[廉巨]に付法して化す。廉居は即普照の師なり。普照に至りて宗勢大に振ふ。蓋し支那に於ける教法の歴史の示すか如く、禪宗は大乘諸教宗の哲學的教理發達其極に達し、人々翻りて簡易直截の力的教義を要求する時代に至りて始めて興隆の盛に向ふか故なり。

次て興徳王の治世となるや、始めて佛心宗の機縁此土に熟し、洪陟禪師なる者あり、亦西堂の資を以て還國説禪、大に王の皈依を博し、是に至りて禪風雞林を靡撫し爾後名僧輩出す。『景德傳燈録』にも新羅陟禪師の法嗣に興徳大王及康太子を擧ぐ。惜矣哉、洪陟の傳今傳はらず。陟の師西堂智藏、堂の師馬祖堂一、祖の師南岳懷讓^{懷讓}には即六祖慧能の嫡子なり。されは新羅禪宗の淵源、直に六祖南頓派に在り。

然るに元和八年[憲徳王三年]金獻貞の撰せる神行禪師の碑文に據れば、行は志空和上の法嗣にして志空は即大照禪師普寂[開元廿七年寂]の入室。寂は北宗神秀の法嗣なり。然らば則、神行は北漸派を新羅に將來せる者と謂ふべし。神行は大曆十四年七十六歳を以て遷化したれば、新羅は興徳王以前に既に北宗を傳へたり。

南宗を傳へし道義と北宗を傳へし神行と何れか先なるか。元と存せし道義の碑今泯没し、其の資廉居の碑も原州法興寺に在りしか、今僅に一片を留むるのみ。然れども『祖堂集』卷十七西堂下出道義に其の世系の大畧を叙す。彼は建中五年甲子[宣徳王五年七八〇]遣唐使金讓恭に隨て入唐して西堂會下に到るとあり、又金溝金山寺縁起にも長慶五年乙巳[憲徳王十七年八二五]道義和上、化を雪岳山に行ふとあり、又廉居禪師斷碑(に)師(は)會昌四年甲子[文聖王六年八四四]示寂すと推測せざるゝ文字残れるあり、彼此參攷するに神行より一時代後るゝこと疑ふべからず。

斯くて新羅禪宗の傳燈に三派あり。其の一は、最舊き傳來にして四祖道信より法朗・神行二代に傳へて神行に至りて遂に北漸派と合せる南北分派以前のもの。其の二は、神行か志空に承けて遵範・慧隱・智證三代に歴傳せる北漸派なり。其の三は、道義か西堂に承けて廉居・普照と傳へし一流と、馬祖の弟子神鑿より眞鑿へ傳へたる一派とを有する南頓派なり。而して眞鑿^{眞鑿}(禪)

師は即慧隱にして醫（禪）師に至りて（南）北頓漸端なく其の傳燈を合す。同しく西堂下出洪陟禪師の法系は詳ならず。

一 南北分派以前の派

大醫—法朗—神行

| (眞鑿)

二 北漸派

—遵範—慧隱—智證

神秀—普寂—志空—神行

三 南頓派の一

洪陟

六祖—南岳—馬祖—西堂—道義—廉居—普照

| 慧徹—道詵

| 如禪師—廣慈禪師

四 南頓派の二

馬祖—神鑿—眞鑿—智證

智證に到りて南北別傳息み、恐らく南派獨り榮しなるべく、曹溪宗の宗名既に是時に唱へられしか。

新羅佛教は禪宗の弘布に至りて其の第四期に入り實に教界を縦斷して禪・教對立の形勢を致し、羅末には既に禪・教の爭論頗る熾烈なるを見る〔祖堂集順支和尚〕。

蓋し新羅佛教第三期に在りては華嚴宗を始とし、密教・淨土宗・律宗の四宗相競て宗勢を張りしと雖、未た是の佛心の一宗の入來らさりしか爲に、新羅人は簡易直截、直に佛の内證に躍入して其の心法を領する能はず。既に哲學的華嚴宗、祈禱を主とする密教、往生を希求する淨土宗、戒律を説く律宗に飽滿せる新羅人は禪宗に接するに至りて一時清涼劑を得たるか如く相

率みて此宗に向へるなり。斯くて新羅滅ひて高麗となるも、是形勢依然變動せず、禪・教相對立して禪一宗と他諸（教）宗と對抗して以て李朝に至れり。

第四（五）章 新羅君臣の崇佛と道詵

〔一 新羅君臣の崇佛〕

金富軾は『三國史記』の論贊に於て新羅の崇佛を評して

「奉浮屠之法、不知其弊、至使閭里比其塔廟、齊民逃於緇褐、兵農浸小而國家日衰、則幾何其不亂且亡也哉。」

と云ひ、『東國通鑑』編纂の李朝史官は（興佛二王）法興・眞興の贊に於て

「始崇佛教、信之既篤、奉之愈謙、唱爲齋戒之邪說、聾聵斯民、爲新羅基禍之主。〔法興〕

佞佛尤甚、創興輪皇龍二寺、鑄成丈六金身、浚民膏血。且屈千乘之尊爲桑門之行、方袍圓頂、以終其身、遂使佛利半於閭閻、齊民盡爲緇褐、流禍無窮。」

と云へり。新羅（君臣）の崇佛は高麗の其と相對して始終衰へす。而して何故斯く信仰惑佛せるかは、佛説と新羅君臣の欲願との相契に於て其の理由を發見するを得へし。

蓋し佛教大乘の眞諦に於る全然個人乃至國家の功利的欲求を超絶して唯た是の涅槃聖淨地に入住するに在り。然るに釋迦臨終布教の事業を以て是世の國王に委任すと傳へられ、法化の源先つ王者を度するに在りとせられしより、佛經所説中、巧に王者の功利的欲求の満足を高調するもの甚多し。（◎上面¹⁹:◎）

〔功德と福田の思想〕

是に於て個人に向て及國王々妃等に向て佛の功德の思想となり修福田の思想となる。即『佛説諸德福田經』西晋法立・法炬共譯〔大正藏第十六卷〕、『佛説作佛戒像經』闕譯人名出後漢錄附

東晋録 [大正大藏第十六卷]、『佛說大乘造像功德經』唐提雲般若譯 [全上]、『佛說灌洗佛經像經』西晋法炬譯 [全上]、『佛說魔訶利頭經』西秦聖堅譯 [全上]、『浴佛功德經』唐義淨譯 [全上]、『造塔功德經』唐日照譯 [全上] に於て説けるか如し。皆或は伽藍堂殿、或は佛像塔浮屠を造ることに由りて無量の福利を得、過去の罪過を除き未來の福田を成し、殊に國王若し此をなせば、諸國國家泰平近隣服轉輪聖王となると云ふ。其の内最明白なるものを『佛說大乘造像功德經』となす。此經は優陀延王なる者佛説(像)を造りし大功德を詳説せるものなり。其の内に造佛像の功德を

「或作其人福報我今當説彌勒、如是之人於生死中、雖復流轉、終不生於貧窮之家、△→次頁上面：△亦不生於邊小國土下劣種姓孤獨之家。又亦不生迷戾車等、商估販貨屠膾等家、乃至不生卑賤伎巧不淨種族外道苦行邪見等家、除因願力並不生彼、是人常生轉輪聖王有大勢力之家。或生淨行婆羅門、富貴自在、無過失家所生之處、常遇諸佛承事供養、或得爲王、能持正法以法教化、不行非道。或作轉輪聖王、七寶成就千子具足、騰空而行化、四天下盡其壽命、自在豐樂。」とあり、爾下『法華經』普門品『阿彌陀經』『阿閼經』等 (△○→左脇△○大凡經と云ふ經に功德を説かざるは殆となし。)

而して更に進みて何故に佛を信じ經を念誦する者に斯の如き種々有形的功德、換言すれば(廣義)生活上の快樂を與ふるかと云ふに、此は偏へに夫等佛菩薩の廣大無邊、必ず遂けすは已まさる願力に依るものとなさるへからず。大乘佛教[道行般若經第一道行品、放光般若經第三門僧那品]に在りては、諸菩薩は六波羅密の淨行を常行して以て自利利他して遍く一切の有情無(非)情を救濟して以て佛地大正覺に到達する大修行者にして、其の立志は即願(力)となりて現る。其の願の必ず遂げらるへき力を有するを以て、

故に菩薩は現に間斷なく無數無邊の衆生を濟度して願を遂げつゝあり、願を遂げつゝあるか故に菩薩の住居する土地の衆生は刹那刹那淨心行を清淨にして菩薩諸惡因より離れつゝあり、其の結局あらゆる在住衆生は一切悉く濟度せられたる時に、其の國土即刹は大正法王國となりて即佛教理想國、換言すれば、淨土となる。□→(次頁下左脇：□終に印度人古來の理想國たる鬱單越を取入れて人間の生活上の一切の欲望を悉く満足せしめて、塵微の缺欲もなき極樂世界を打立るに至る。)故に功德は、之を菩薩の側◎→次々頁上面：◎より觀れば願力の實現に外ならず、菩薩より觀れば偉大なる自力に汚、衆生より觀れば安穩なる他力なり。

〔菩薩の願力〕

斯の如き菩薩の願は抑々普賢十大願 [華嚴經普賢行願品] より阿閼二十願、更に進みて彌陀の二十四願 [大阿彌陀經、平等覺經]、三十六願 [無量壽莊嚴經]、四十八願 [無量壽經] と迄發展す。而して是等願數の増加するは、主として願に由る國內外の衆生・諸聖衆の得益を緊説析説せるか爲に外ならず。即菩薩の願力實現か單に(衆生をして)四諦を了して精神的安養に到らしむるのみに非らず。更に進みて有形的生活をも含みて一切の不快不足を除祛して望月の如き充足して常恒快樂なる(に溢るゝ)生活を享受するを得しめんとするなり。

例へば『無量壽經』~~四十八願を觀るに~~(を見るに四十八願中廿六願は國中の菩薩△→次頁下面左脇：△聲聞及人民の功德利益に關する者に汚、他の十二願は他方世界の菩薩衆及人民の聞名得益に關する者に汚、二十四願三十六願に比汚是等得益願著しく増加す。)法藏比丘四十八願を宣へ了りて世尊更に阿難に向て比丘の願中實現の結果を垂示するに曰く

「自行六波羅密、教人令行無失數劫積功累德、隨其生處、在意所欲、無量寶藏、自然發應、教

化安立、無數衆生。住於無上正眞之道、或爲長者居士豪姓尊貴、或爲刹利國君轉輪聖帝、或爲六欲天主乃至梵王、常以四事供養、恭敬一切諸佛。」

~~是等は~~佛教布教の方法が愈々心理的となるに從て、功德と生活上の快樂との到底離るへからざるを見て、漸く願の種類に衆生衆聖に現在世に於ける生活上の欲求満足をも挿入するに至れるなり。是れ即、佛教に於る功德説成立の教理的根本にして、國王大臣乃至平民等をして信佛功德の能く現世的利益を與ふと信せしむるを得たる所以なり。(附箋：故に直心の深心・菩薩心(・布施)等は即其の自身の中に淨土を成すか故に、直心・深心・菩薩心・布施等の淨行は同時に淨土の功德を満す所以にして、別に其の結果と見るべき生活上の快樂の伴到を要求せざるなり。)

(右脇²⁰：淨土の眞實義は心淨佛土淨に在りて、之に住する一切衆生の心行清淨なる以外に他の條件を要求せず(さること□頭：□『維摩經』『佛國經』の所説の如し)。心行清淨は一切の欲心の淨盡を根本とす。然るに是等諸佛の淨土は人間生活欲を滅せしめざるのみならず其の所有欲を満足し、~~亦~~所有生活上の快樂を享受せしむる處となす。正に當初→下右脇→菩薩の修行と性質を顛倒すと謂はざるへからず。恐らく是の如きは淨土と印度人の理想國との結合と、印度人の宗教に對する功利的要求とに順應して〔印無〕上面左脇：曇鸞の『略論安樂淨土義』に、淨土には器世間清淨と衆生世間清淨とありて其中、器世間清淨に十七種の莊嚴成就ありて其第十七には「衆生有所欲樂、隨心稱意、無不満足。」を挙げたり。)

(次頁上面：之に反して三寶を信奉せされは、如何に其の國土自然に恵まるも天龍神將等の怒に由りて安泰なる能はず、遂に滅亡に趣く。『大方等』大集經』護塔品〔45卷〕に世尊説きて曰く

「〔佛言、龍王莫如是説、何以故。今有二萬大福德人見於四諦、從沙勒國而往彼住。以彼二萬福德衆生有大力故、於此瞿摩娑羅香山大支提處、日夜常來一切供養。龍王當知、如是之時恒不饑乏。〕又迦葉佛時、彼于闐國名迦邏沙摩。國土廣大安穩豐樂、種々華果衆生受用。彼國多有百千五通聖人世間福由、依止其中係念坐禪、樂阿耨多羅三藐三菩提。以其國土安穩豐樂、彼土衆生多行放逸貪著五欲、謗毀聖人爲作惡名、以灰塵塗彼聖人。時諸行者受斯辱己、各離彼國散向餘方。時彼衆生見聖人去心大歡喜、是因縁。故彼國土中水天火天皆生瞋忿、所有諸水河池泉井一切枯渴、時彼衆生無水火、故餓渴皆死、是時國土自然丘荒(上面左脇：亡荒?)。佛告龍王、我今不久往瞿摩娑羅牟尼住處、結加七日受解脫樂、令于闐國於我滅度後一百年、是時彼國還復興立、多饒城邑郡縣村落、人民熾盛、皆樂大乘安穩快樂、種々飲食及諸果華無所乏少。〕」

〔護國の思想〕

殊に支那に入りてより~~是の~~尤熾、一轉して佛教護國の思想となり、『仁王經』『金光明經』~~と~~と迄發達す〔二教共に僞經なるへし〕。されは、一國にして其の形勢~~四圍~~に(隣近に)競争國家を有し、我盛榮えて彼を併すか、彼興りて我を併すかと云ふ情況に於ては、是の方便一面より佛教弘布せらるゝこと極めて容易なり。三國鼎立當時の形勢、即正に之に當る。されは(前述)百濟聖王の日本に佛教を送るや~~其~~(此)點を高調せり。新羅君臣崇佛の眞因亦此に在りしか如し。佛教は國祚加護の法力あり、之を信する國王國家は吉祥續きて遂に其の興隆を致すと云ふ信念なり。

而して(初に)佛説の此一面を高調力説せる僧侶は亦彼の慈藏大師其人なるか如し。『遺事』皇龍寺九層塔に、慈藏か支那五臺山大和池畔に於て神人に會し、神人爲に還國後皇龍寺に九層塔を立つれば、其の功德に因りて隣國降伏し九

韓來貢し王祚永く安からんと教へ、後果して其の教の如しとあり。爾後新羅の高僧の法力を以て能く國難を鎮禳せりと傳へらるゝ者少からず。

「東萊梵魚寺縁起」に興徳王朝、日本十萬餘兵を擧げて來寇せんとするに、義相大師七日七夜金井山に在りて國敵退散の大祈禱を成し、大威相の天神現れ海東を加護し倭兵遂に來らずとあり。年代の錯誤且荒誕の説をなして義相の事蹟を飾るあり。又『遺事』及「華嚴寺縁起」には唐高宗新羅の國を獻せざるを怒り、將に大軍を遣して討たんとするや、文武王大に懼れ、密教大德明朗をして密壇法を修して之を禳はしめ、遂に其請に由りて狼山の四天（王）寺を創めて以て國家鎮護の祈願寺となすとあり。

〔新羅佛教の盛況〕

斯の如くなれば、新羅統三業成るの後、君臣上下崇佛の愈々盛なるは勢の當然なり。今日現存して聊か新羅佛教の盛況を想像するに足る彼の慶州奉徳寺の大梵鐘〔孝昭王四年武列王の爲に奉徳寺を建立す〕、佛國寺の石窟菴（石佛）〔景德王十年宰相金大城現世父母の爲に佛國寺を經始す〕、（求禮）華嚴寺の石塔及『華嚴經』を刻せる石壁〔光啓二年定康王憲康王の追善の爲に賢俊大德等の華嚴講會を設けしに、鍊石や六十華嚴・四十華嚴兩部〕は何れも統三以後の製作なり。されは歴代造寺刻像の爲に糜財大、哀莊王〔八〇〇～八〇八〕其四年、新に佛宇を創むるを禁し、唯た修葺を許し、又錦繡を以て佛事を成し、金銀を以て器用を造るを禁したれば實行を見ず。

今新羅佛教の盛況を知るへき一資料として現存朝鮮寺刹の縁起を調査するに、朝鮮佛教卅一本山中其開基年代の新羅に在りと傳ふるは、水原龍珠寺の文聖王時の廉居禪師を開山とし、報恩法住寺の眞興王時の求法僧義信和尚を開山とし、公州麻谷寺の憲安王頃の普照禪師を開山とし、（◎上面：◎全州威鳳寺の眞平王廿六年を創建年代とする。）（全北）錦山の寶石寺の憲康王頃の

祖丘和尚を開山とし、長城白羊寺の善徳王頃の如幻和尚を開山とし、順天松廣寺の時代不明、新羅の惠璘和尚を開山とし、同仙巖寺の羅末道詵和尚を開山とし、大邱桐華寺の惠恭王朝の心地和尚を開山とし、永川銀梅寺の憲徳王時の元岳和尚を開山とし、義城孤雲寺の義相大師を開山とし、長鬢祇林（聞慶金龍）寺の眞平王時の雲達和尚を開山とし、長鬢祇林寺か善徳王時光有和尚を開山とし、海印寺か哀莊王時順應・理貞兩和尚を開山とし、梁山通度寺か慈藏大師を開山とし、東萊梵魚寺か義相大師を開山とする。海南大興寺か百濟久爾莘王時の靜觀和尚と新羅の阿道和尚を開山とするは信すへからざるも亦恐らく羅代の創建に在るへく、杆城乾鳳寺か惠恭王時の發徴和尚を開山とする。金剛山楡岾寺か亦恐く新羅時代の創建に係るなるへき〔閔漬の縁起は不可信〕。平昌月精寺の慈藏大師を開山とする、求禮の華嚴寺か義相大師を重興和尚とする等、要するに江原道及三南に在る（山中）大刹は何れも其の建立年代を新羅におけり。

朝鮮寺刹は麗・李兩朝を通して新たに建立せられしは（其領土に加へられし）西北邊及都城以外其數少ければ、是等大刹以外の東南部の寺刹も大部分は羅代の創建に係かると見るへく、其數正さに現存全寺刹數の半に達す。新羅、佛法を【第一冊⇒第二冊】行ひしより滅亡に至る迄四百餘年、苟も山水の清淨幽邃、修法に適ふ所には寺刹庵子の營まれざるはなかりしなり。李朝の俚諺に曰く朝鮮の（好）山水擧げて之を僧侶の占斷に委せりと。

是等無數の寺殿堂塔は新羅滅亡と其の運命を共にせず、高麗太祖も亦深く前述佛功德福田を信し、篤く佛法に皈依し崇佛敢て新羅に譲らず、羅代寺刹の外、更に關西北邊及京畿に於て寺刹を増創せり。されは是等羅代の經營に成りて海東美術の粹を發揮したる堂塔佛像も其儘安全に麗代の幾世かを經過せしか、終に東北方の寺刹

は高（顯）宗朝契丹兵の亂入に由り、慶尚道一帯は高宗朝蒙古兵の侵入に由り、憐むへし、焦土となれり。事は『三國遺事』『麗史』及李奎報の『李相國（集）』に詳なり。

二 道誥禪師

〔地理風水説の將來と功德福田思想との結合〕
（新羅に在りて）佛法の功德福田の思想か漸く強められ、其の具體的發展を要求せらるに至り、恰も（隋）唐代に於て（益々）盛に行はれし地理風水説の新羅に將來せられ、其の神秘的にして能く民信を捉ふるや、佛法側に在りても此説を究めて之と功德福田思想とを結び合せて以て益々佛法に對する君臣上下の信仰を強くし、然らずは風水説に由りて勢力範圍を侵蝕さるゝの虞ありしを反りて、之をも我が掌裏に収め之を利用して益々佛法の方便方面を助長するに至れり。（□前頁上面：□

元の趙汭の「葬書問對」に云ふか如く、『漢書』藝文志に既に風水相墓の法家を叙し、張平子の「冢賦」に既に墳墓の相擇、士大夫の間に行はれしを證し、後漢末には風水の説漸く流布するを見る。而して隋唐に至りて愈々盛なり。◎→右□按ずるに◎『圖書集成』博物彙編の堪輿部にも △→（右脇：△隋に於て肅吉・舒綽の二人を擧げ、其の著す所の地術書目を列擧し、又）『地理正宗』を引きて斯術の源流を序て祖師楊筠松〔救貧仙人〕、二祖曾文遄、三祖賴文俊、四祖丁珪、五祖濮都監、六祖廖禹、七祖孫世南、八祖賴白鬚、九祖李鴉鵲、十祖鍾可朝、以て宋唐九僊に至る十祖皆唐人なり。其外有名なる李淳風・張燕（國）公説・一行禪師の如き名地理術家も唐代人なり。斯術の唐に至りて益々廣く行はれしこと知るへし。²¹⁾

而して新羅佛徒の風水説を究めし者の代表者は道誥禪師となす。而して新羅滅ひ高麗代り、佛法の功德思想愈々深刻となるに及び、道誥の

崇拜益々盛となり。其の影響絶大、時々國家重要問題發生の原となることあるに至り、（○上面：○李朝に至りて尚衰へず。）是れ實に佛法功德福田思想の大發展にして朝鮮思想史上の一重要項たり。

〔道誥の傳〕

（今傳はる）道誥の傳には新舊二種あり。舊者は新羅（高麗）毅宗四年文臣崔惟清の奉教撰する「玉龍寺先覺國師碑銘」なり。新者は『輿地勝覽』を始とし、靈巖の道岬寺事蹟、順天の仙巖寺事蹟、釋王寺所傳高麗國師道誥傳、西（山）大師『清虛集』答楊滄海書等、僧侶間の所傳なり。（○上面：○靈巖月出山道岬寺には古碑存すれど、『輿〔地勝〕覽』編纂當時既に湮漫して全く讀むへからずと。）

而して新説は何れも師を以て唐一行禪師に師事して地理術を傳授すとなす。然れども一行は唐初の人、師は唐末の人、年代甚相應せず、又言ふ所、荒誕にして不可信、崔碑の信憑すへきか如くならず。『東史會綱』の著者老村李象徳は附論辨に於て之を辨し、『東史綱目』も附録上考異道誥事に於て『輿〔地勝〕覽』の所記を甚恠異となし、崔碑を取録す。

（師）諱は道誥、金氏、全羅道靈巖郡の人、興徳王元年生れ光化元年〔孝恭王二年〕寂す。享年七十二。師生れて異質あり。十五歳祝髮して華嚴寺に入り大乘を學ぶ。時に慧徹大師（谷城）桐裏寺に開堂し、西堂直傳の南宗禪を揮ふ。師廿歳往きて之に參し三年にして密傳を得、悟後、~~出沒隱見~~（其）行迹（行雲流水の如く）端倪すへからず。

嘗て智異山（嶺）に於て小菴を卓てゝ安息す。一日異人來り地理術を授け（約して）南海汀濱に於て（會し、爲に）沙を聚めて三韓山川順逆の形勢を形示し、既に之（之）く所知らず。諺傳に曰く、此地即今の求禮郡界にして土人、之を砂土圖村と云ふ。

師、是に於て三韓山川の亂氣を鎮靖する爲に要處に寺塔建造の計画を立つ。△（上面：△殊に靈巖月出山天王峰に壇を設けて毎午年五月五日に祭を致し、朝鮮の爲に祈福禳災す。造塔の業成り、月出山に還りて道岬寺を宥め來學に接す。晩に光陽白雉山玉龍寺に栖遲し、一度憲康王に招かれ京師に赴きて法要を説き、幾くならずして玉龍寺に返り、光化元年寂す。享年七十二歳。王、了空大師の號を贈り、朴仁範に命して碑文を製せしめんか、遂に立るに及はず（文亦傳はらず。）

高麗に至りて王室の崇尊益篤く、顯宗大禪師を追贈し、肅宗更に王師を加へ、仁宗又最上階先覺國師を追贈す。高麗王家は道誥か松都を過ぎて太祖の父隆の爲に天機を洩して天命を受くる開國の君主を生まざることを豫言せるを傳承して以て、道誥を以て國祚啓運の功勞者となす。崔應清の撰する加封先覺國師教書及官誥に詳なり。

「竊妙既極於佛祖、緒餘益精於陰陽……遂指先祖之室、謂當出聖人。」

靈巖道岬寺道誥實録に道誥壓氣鎮氣の原理を述べて曰く

「既還以西學多所得 [一行に學ふと云ふ也]。因欲救正土病、宣洩風氣、使邦基鞏固、民物安阜。以爲我國地形如行舟、太白金剛其首也、月出瀛州其尾也、扶安之邊山其柁也、嶺南之智異其楫也、綾州之雲柱（住）其腹也。舟之浮于水也、有物焉以鎮其首尾背腹、有柁楫焉以制其行、然後免乎欹危漂沒矣。於是乎建寺塔以鎮之、立佛像以壓之。特於雲柱（住）之下、蜿蜒虯起處、則別設千佛千塔、以實其背腹。而於金剛月出尤致精、蓋以首尾爲重。世以月出爲小金剛者、其在斯歟。」[西山大師答楊滄海書亦略同]

と。（◎上面：◎『輿〔地勝〕覽』

「全南綾城縣南（西）廿五里、有千佛山。有寺曰雲住寺。寺之左右山背、石佛石塔各一千。又

有石室、二石佛相背而坐。）」

是れ、地理風水説と佛法功德とを結付けたる者なり。

〔道誥風水説の勢力〕

案するに風水の鎮氣壓氣と佛法の塔堂佛像建立の功德とは本と其の觀念の根本を異にす。風水説に在りては、あく迄陰陽五行説を本とするか故に、其の壓氣鎮氣も亦（山水形勢に就て）陰陽五行の按排に由りて其の調和を圖るものなり。従て頗る具體的意義となる。例へば『圖書集成』堪輿部紀事に「老學菴筆記」を引きて

「蔡太師父準葬、臨平山、山爲駝形。術家謂駝負重則行、故作塔于駝峰。」

と云ふか如し。又『輿地勝覽』全羅道珍原縣佛臺山に

「在縣北五里、鎮山。術者以山有走龍勢、建佛宇稱（横：？）上下淵以鎮之。又山東北有大洞小洞、新羅時立三佛宇曰安龍、定龍、青龍。今皆不可考。」

と云ふ（△上面：△ひ、又『麗史』所謂太祖の遺訓と稱する者に

「車峴以南、公州江外山形地勢、並趨背逆。人心亦然。彼下州六郡人、參與朝廷、與王侯國戚婚姻、得秉國政、則或變亂國家。或御統合之怨、犯蹕生亂、弄權亂政。雖其良民、不宜在位用事。」とあり、車峴以南山川の背逆と云ふは、王都開城、北に在るに反りて山川南嚮して南に向て服従する如き意なり。故に李朝に至りても大凡叛逆の臣の處刑は、桎梏して諸方引廻し結局、竹山郡[今の安城]朝避山に於て處刑するを法とす。朝避山は山勢南嚮して京城に背逆して立~~つ~~つか故なり、亦道誥風水説の勢力と視做すへし）か如し。故に是場合には必しも佛宇塔像を建るを要せず、或は大石或は鍊柱或は城樓等、重量偉大なるものを建つれば則、其の目的を達するなり。

又地理術は佛教傳來以前の起源なるか故に、

最初には佛教的思想の混せさりしなり。朝鮮の亂氣鎮壓と云ふも、(假りに朝鮮の)山川糾紛し輕躁にして沈着ならずと云ふ觀念にして成立せしむるも、之を壓ふるには必しも佛宇塔像を建るを要せざるなり。例へば、京城内の北岳山下の一邸内に大石をおきて北岳の動氣を壓するものなるか如し。而して大石・鍬竿等の代りに佛宇塔像を建てし所に風水説と佛法との結着ありて、換言すれば、佛法か風水説を利用して其の功德(説)の方便となせるなり。

高麗の名禪師眞覺大師の「上康宗大王書」にも

「某聞、昔我世尊臨入滅度、佛法外護、分附國王大臣、人天福田、委囑沙門釋子。」

とありて、人天有形無形の福田功德を修するは即沙門の任務となすか故に、鎮氣壓氣して國の治平を致すか如きは沙門當然の法務と視做すを得へしと雖、佛法の功德なるものは、地理風水説に比しては純粹宗教的唯心的觀念的にして毫も物質(理)的迷信を伴はず。故に佛の所説の種々伽藍塔像の功德は、之に由りて佛菩薩の無上力を其の人其の國の上に垂加せしめて端單的に大功德を與へ、或は過去の罪業を洗除し或は現未の福田を形成するなり。之には(何等)陰陽五行、龍馳(蛇駝)の如き物理的説明を要せざるなり。

されは實は國王大臣か其の國都一處に於て丹精を抽て、大伽藍大寶塔乃至大佛像を建立しなは、之に由りて全國の國神神補を(土鎮靖を)贏得て、國家太平、人民安康となると信せらるへきこと、(眞興王の)慶州皇龍寺九層塔、(聖武帝)奈良東大寺の盧遮(舎)那佛の如し。然るに更に國內の肝要處と惟はるゝ處に佛像堂塔を建立しなは、其は所謂(本流の左右に更に)渠を開きて水を通する者、佛力の周到を圖るに於て遺憾なし。(◎上面:◎是に至りて地氣淆亂の難處に寺塔を作るは、地理説の壓氣に佛力を

加ふる者にして、其効更に甚大なりと見らる。例へば『益齋集』「重修開國律寺記」に太祖か御者の言に聽て、開城風水の重地、都城東南隅、所謂三鉗地に開國律寺を開創せるか如し。)

然るに道説の塔像建立は其の動機を地理説におきて地理的亂氣を塔像の功德に由りて鎮壓せんと云ふなり。塔像亦重き物體なるか故に、浮亂の氣なる者を鎮壓し得るに不可能ならずと雖、其か亂氣浮氣の物理的鎮壓なる以上、佛像塔堂の眞の功德を提唱する者には非ざるなり。故に之を視るに佛法の左道となすも辭するに言なし(辨するに辭なし)。而して後世道説は地理の大家として専ら上下の崇拜を博し、其の悟境得力に就ては何等傳ふる所なきに至れるは、彼の爲に悲まざるを得す。(△上面:△

【風水説と佛教との不一致】

且又風水説は、佛教とは死者の肉體に對する觀念に於て根本的に相容れず。風水説は郭璞『古本葬經』に

「氣乘風則發、界水則止。古人聚之便不發、行之便有止。故謂之風水。風水之法、得水爲上、藏風次之。」

と云ふか如く、善地を擇ひて(其處に適當に水氣ありて)永く骨をして乾きて塵化飛散せず、以て其の靈魂を留めて後孫の爲に冥助をなすを妙訣となす。(○上頭:○朝鮮民間信仰に墓の吉地とは、數百年經るとも窆内の骨を腐朽し又消滅塵化せしざる故土質を有する所となす。具體的例と沔黃海道某氏の先塋二百五十年に沔中の骸骨潤澤にして黄色を有し完全に原形を存するを實檢せりと云ふ[延安普通學校民謠調查報告書の一節]。故に佛教か涅槃の概念を眞空に眞きて死すると共に皮肉毛骨一切皆滅して一塵一滓遺殘るなきを希求すると正に相反す。且つ又佛教は三世を通して因果を立て一切人生の禍福を、因果律を以て説明す。是點儒教の積善餘慶、積惡餘殃²²と同一原理の上に立つ。然に風

水説は是の（道徳的）因果律を無視して専ら墳墓内に於ける死者の靈魂の安在と否とを以て其の家の祥災を招くとす。正に儒佛道三教の道徳的~~第一~~原理の否定なり。

故に死者に對する正統觀念及家の禍福祥災に對する道徳的觀念に於て、風水説と佛教とは嚴に一致する能は~~さ~~ざるなり。（◎右脇：◎風水は所謂奪神功改天命と稱して、人間卑陋なる私利欲を働して道理を顧みさらんとするもの也。）されは新羅高麗に在りても誠に佛法を信せる王者及居士は遺言して火葬に附せしめたり。

若し新羅に~~在りて~~百濟の古代に在りて僧侶か確乎たる涅槃觀及因果説上より風水説を排斥したりしならば、必ずや風水説と△→次頁上面：△朝鮮人社會との關係は決して今（歴史）の其の如くならずして、朝鮮人の風水説の迷信に汨没して遂に浮上ること能はさること、今の彼等の如くならずしならん。

是點に於て、道説等の思索のあまりに方便的にあまりに風俗なりしを惜まざるを得ず。然れト~~ト~~是は支那文化に完全に隸屬して支那に行はるゝものを即（眞）善美と~~視~~無條件に受取る朝鮮人に向ては責むへからざる事に屬するのみ。）

道説の出現に由りて、一方朝鮮の地理術は愈々流行して上下一般に酷信せられ、他方法と不可離の關係を締して爾後、朝鮮僧侶の斯術を習ふ者甚多し。蓋し支那に在りても（唐）一行禪師始め、僧にして風水の大家として傳へらるゝ者、唐の司馬頭陀・浮屠泓、宋の達僧・鐸長老、明の幕溝僧・非幻和尚等[圖書集成堪輿部名流列傳]歴代輩出すと雖、朝鮮の僧と地術との關係も決して之に劣らず。

〔朝鮮に於ける地理風水の歴史〕

按するに朝鮮に於ける地理風水の歴史、其の由來極めて古し。而して三國中、百濟最先きに之を傳ふ其は恐らく斯術の江西・江南に最先に流

布[元趙汭葬書問對]せるか爲なるへし。『周書』異域傳の百濟に

「亦解醫藥卜筮占相之術。」

とあり、又『隋書』百濟傳にも

「亦知醫藥著龜占相之術。」

とあり。『北史』百濟傳に其の風俗を叙して

「知醫藥著龜與占相術陰陽五行法。」

とあり。而して（『日本書紀』）推古天皇十年冬十月、百濟の貢僧觀勒、曆本及天文地理書并遁甲方術の書を獻するありて、既に百濟の僧の斯術を究めしを證す。

而して（支那正史）高句麗・新羅の傳には其國に斯術を傳ふるを言はず。但し（『三國史記』）新羅本紀脫解尼師今に

「專精學問、兼知地理。望楊山下瓠公宅、以爲吉地、設計以取而居之。其地後爲月城。」

とあれト、時代過早、其事神怪、信すへからず。

~~其の三~~『三國遺事』卷三皇龍寺九層塔の項に慈藏か道説の言と略類せる朝鮮地理の（糾）亂浮動を説ける如きありと雖、猶疑はし。或は僧一然か~~想像の辭~~（舞文構辭せるもの）ならざるか。慈藏の意要は塔の功德に由りて~~三~~（の~~六~~）九韓歸服に在りて、即純粹佛法功德に外ならされはなり。

既に~~テ~~新羅三國を統一するに至りて（舊百濟の文明の移入れらるゝと同時に）唐の文物直接滔々として此國に將來せらる。是に於て風水地理説の民心浸蝕の證左、歴々擧ぐへし。（◎前々頁上面：◎地理に陰宅と陽宅とあり。都城家屋の相地は即陽宅に~~テ~~、墓地の相擇は即陰宅なり。而~~テ~~朝鮮にも（陰宅共に）陽宅~~先~~に行はれしか如し。其は道説の地理を即塔造等の建立地を相定し又麗朝太祖の家の爲に家屋を改構~~テ~~法に合せしめしとある~~をも知るへく~~又は即陰宅陽宅地理に~~テ~~、後に引く大崇福寺の碑は即陰宅地理術の證なり。而~~テ~~陰宅地理は後李朝に至りて尤盛に~~テ~~、高麗朝には猶左迄ならず。是れ、佛教の

死後觀と風水説と相容れず、又（李朝の思想信仰を統制せる）朱子の風水觀に原因する也。）

憲徳王〔八〇九～八二五〕の五年金貞獻の撰文に係る「斷俗寺神行禪師碑」の末段に斷俗寺の山水を叙する中に

「北倚獨立之高岡、西隣三藏之迥谷。樓（挂）烟月於山頭、捐金玉於淵底。豈惟地理之崔峯、復乃靈神之洞窟也。」

とあり。其地理の崔峯と云ふは單に地形の高大危峭を言ふに非ずして、地術上の形勢を言ふこと勿論なり。又羅末略道説と同時代崔致遠の撰せる新羅國初「月山大崇福寺碑銘」に

「茲地也、威³⁹卑³⁹驚頭⁷。德³⁹峻³⁹龍耳³⁹。」とあり。按するに郭璞『錦囊經』〔葬書〕に曰く「勢止形仰、前澗後崗、龍首軾之。藏鼻頰、吉昌、可致王侯。「以坎〔北〕爲首即甲角、震〔東〕耳也。」

注に曰く

「燕國公張説、與玄宗俱微行、見葬龍耳者、誤謂龍角。往其家、勸移他地。其人答曰、葬龍耳、三年則白衣天子到門前云。」

と。是地の（地理的）相地の吉祥を得しを謂へるなり。（◎上面：◎尚之に次て

「洎貞元戊寅〔元聖王十四年、七九八〕冬遺教窀穸之事。因山是命、擇地尤難。乃指淨居、將安秘殿。」

と云ひて、當時既に陵墳の擇地の重大事なりしを證し、又其次に

「但得青烏善視、豈令白馬悲嘶。」

とありて、恐らく既に『青烏經』も讀まれしならん。）

斯の如く新羅（百濟には既に上代より地理の一術、世に其業者あり、又）僧徒中、之を修むる者も乏しからず。新羅も統三以後に至りては、或は（勝國）百濟より或は唐より斯術を傳ふ。

（故に）道説は必しも之を唐一行禪師の傳を得るとなさずとも、百濟・新羅兩國、地理術の傳

（秘訣）を修得して其の妙に到れりと視れば、毫も其の地理術の大家となりしを恠むに足らず。高麗に至りて王氏と道説堪輿術との間、妙縁を（締）結し、益々其の崇敬を高め、同時に僧徒にして斯術を學ぶ者絶えず。

第五章 新羅に於ける三教二教調和論

紅薔薇と白薔薇とを相接して垣根に植ゆるトは久しからずして花粉相互に交換（錯）し、花色にも白中紅點あり、紅中白點ある雜種を咲かしむ。是の如きは人生思想界の現象にも明に認むるを得へし。

儒教・道教・佛教の三教、一地域内に行はるゝ時は、初は互に他を排撃して以て之を（驅）逐して我教のみの地域となさんと努力すと雖、暫にして其の到底驅逐し了するト能はず、又（相互に）其の教義に於て（其の地其の人に向て）確乎（と）して流行すへき理由の存在するを認識するに及ひては、翻りて排撃する代りに調和説を考出して以て平和の裡に相携へて其國土内の民生を教化せんとするに至る。而して是の調和論は（各教の）偏執なき學者に由りて唱出さるゝは勿論なるも、例として比較的勢振〔ふる〕はさる教の側より唱出さるゝは人情の自然と謂はさるへからず。

故に新羅・高麗の如き佛教、確に國教の位地を占めて、儒教は平庸倫常の常識學と視做さるゝ時代に於ては調和論、儒者側より多く唱出さる。李朝に至りて佛教、社會教化の圈外に迫逐せられ、儒教獨り思想信仰を統制する時勢となりては調和論、反りて佛徒の側より唱出さる。

三教二教調和説は既に支那六朝時代僧俗に由り盛に唱へられし所、別に朝鮮思想史に始まりしに非ずと雖、亦羅代の顯著なる思想的現象として之を概述せんとす。

前述高句麗蓋蘇文の三教並行説は（事）尚簡に

して果して教理の理解~~を~~（よりして）調和的見解にまで進めるや否やを徴する能はず。百済に在りては其の興國の英主近肖古王〔三四五～三七四〕の時、~~王太子~~高句麗の岡王（〔故國原王〕）親ら來侵すや、王太子、將軍莫古解と軍を率ゐて之を半乞壤に至りて之を敗る。王太子、更に之を追撃せんとするや、莫古解、諫めて止めしめ、道家の言を引きて

「知足不辱、知止不殆。今所得多矣、何必求多。」と云へり。道家の言は老子に在り、以て當時老子の百済に傳はり、士流の之を讀みしを證す。又新羅の（太宗の第二子）名士金仁問の列傳には「幼而就學、多讀儒家之書、兼涉老莊浮屠之說」とありて彼か三教を兼學せるを證す。蓋し是れ、新羅當代士流の爲學の通則なりしなるへし。

（又前述の如く）眞興王か創めて以て士風の切磋琢磨に資せる彼の花郎制度は、恐らく薩摩健兒社の如き性質組織なりしならんか。「其の綱領は亦三教の長を採りしか如し。『三國史』眞興王本紀に崔致遠「鸞郎碑」を引用して

「國有玄妙之道曰風流。設教之源、備詳仙史。實乃包含三教、接化群生。且如入則孝於家、出則忠於國、魯司寇之旨也。處無爲之事、行不言之教、周柱史之宗也。諸惡莫作、諸善奉行、竺乾太子之化。」

蓋し忠孝を勵まし、名聲を求めず人の爲に善を行ふの意を言へるなるへきも、其の制度組織當時或は三教の旨に取りて以て（花郎の）心得行儀を定めしか。（㊦上面：㊦「〔4頁後へ移動〕新羅の主人か住へるには儒學を修め、宗教には佛教を奉ず。而して佛と道と併修めて共に塵俗に染まざるの教と信せるは、其の由來既に久し」『朝鮮金石總覽』新羅期十五慶州甘山寺彌勒菩薩造像記〔聖德王十八年己未〕には造像善士志誠の日常を述へて

「性諧山水、慕莊老之逍遙。志重眞宗、希無著之玄寂。一年六十七、致王事於清朝、遂歸田於開野。披閱五千言之

道德、棄名位而入玄、窮研十七地之法門、擯色空而俱滅。」とあり、又十六甘山寺阿彌陀如來造像記〔聖德王十九年庚申〕には造像善士金志全の好尚を述へ

「仰慕無著眞宗、時々讀瑜伽之論、兼愛莊周玄道、日々覽逍遙之篇。」

とあり。是の如き風尚、國末に至りて衰へず、遂に崔孤雲となりて大に顯著なり。唐代道家思想の盛を知れば、新羅思想界に如是現るは當然となすへく）新羅統三以後、唐の文化、滔々として將來せらる。唐代道教、大に盛なり、老莊の學の此國に講せられしこと、想像するに難からず。

是に於て儒・佛・道三教の教義、鼎立して行はる。三教行はれて（㊦次頁上面：殊に羅末禪宗流行して士流亦來りて之を學ひ、單的に佛教の眞諦を玩味するを得るに至りて儒と佛と知識的に新羅人に由りて理解せらる。）而して佛教の地位尤優越、國教として國民上下の精神生活を統制す。（㊦）故に三教（二教）調和説は須らく文臣儒士の側より唱へらるへし、佛徒の側より唱らるへきに非ず。即彼等は異教たるを以て佛教を排斥せんとはせず、反りて儒・佛二教の間共稟（通）の道即原理、存在して決して柄鑿相容れざる者には非ざるを認むるに至れり。

今の新羅人の遺什、固より多からざるも、彼の新羅掉尾の文豪にして眞智王・孝恭王頃の崔致遠の什及其の行蹟に於て、是の二教調和思想の現はるゝを見るへし。是れ李朝の儒宗李退溪か彼を誦るに「佞佛文士」を以てする所以なり。然れども是の如きは、朱子學を（奉り）以て一切（爾他）思想を排斥する李朝儒者の思及はさる別天地に外ならず。以て必しも佞佛とは稱すへからず、寧ろ思想發達の當然現象と視做さるへからず。

定康王二年丁未、崔致遠の奉教撰に係かる河東雙谿寺「眞鑿禪師大空塔碑」には六朝の沈約の「孔發其端、釋窮其致」を擧げて而して之を附衍説明して更に孔子（と釋迦）の以心傳心不

言説の極致²³に至りて相合して異ならざるを言へり。即崔致遠の兩教觀は全く六朝時代の三教二教調和論者張融・孫綽・慧遠・沈約等の流を受けて儒・佛二教其の教義の眞諦心訣に至りては必しも相乖るにあらず。但た其の之を教に發するに當りて淺深遠奥顯の差あるのみ²⁴。佛は深を説き幽を説き、儒は淺を説き顯を説くとす。

されは稍降りて同うく文臣(崔致遠の從弟[高麗の崔彦擣也])崔仁滾か孝恭・神徳二代の王師、行寂朗空大師の「白月栖雲塔碑文」を製するや、明白に「門人翰林學士守兵部侍郎知瑞書院事賜紫金魚袋臣崔仁滾奉教撰」と記し、以て文臣にして佛門の徒弟たるを異とせざるを證し、又彼の海東漢學の鼻祖とも稱すへき薛聰か元曉の子と傳へらるゝか如きも、新羅に在りて統三頃より既に儒・佛二教の間頗る親密にして相互に排斥する態度に出てさりしを想像せしむるものあり。

又崔致遠其人の行蹟も、仕へて(▲大夫) 宰令に陞れるは、儒の道なり、好て佛典を讀み母兄(華嚴大德)賢俊及定玄師等と親交を締し海印寺雙谿寺に優遊せるは、佛の道なり、晩年、世念を一斷し専ら虚無に入りてを體し往々鍊丹を學ひ終に尸解昇天せりと傳へらるゝは、老莊(道家)の道なり。崔致遠は獨り其の思想に於て三教調和を唱へしのみならず、其の一生の行蹟に於ても之を實現せりと視るを得へし。(×上面：×獨り孤雲のみならず。新羅統三以後の士人の生活に亦同様型式ありしは、☒→4頁☒新羅の士人か仕へるには儒學を修め、宗教には佛教を奉ず。而して佛と道と併修めて共に塵俗に染まざるの教と信せるは、其の由來既に久し。『朝鮮金石総覽』新羅期十五慶州甘山寺彌勒菩薩造像記[聖徳王十八年己未]には造像善士志誠の日常を述へて

「性諧山水、慕莊老之逍遙。志重眞宗、希無著

之玄寂。年六十七、致王事於清朝、遂歸田於閭野。披閱五千言之道德、棄名位而入玄、窮研十七地之法門、壞色空而俱滅。」

とあり、又十六甘山寺阿彌陀如來造像記[聖徳王十九年庚申]には造像善士金志全の好尚を述へ

「仰慕無著眞宗、時々讀瑜伽之論、兼愛莊周玄道、日々覽逍遙之篇。」

とあり。是の如き風尚、國末に至りて衰へず、遂に崔孤雲となりて大に顯著なり。唐代道家思想の盛を知れば、新羅思想界に如是現るは當然となすへく)要するに新羅の宗教及哲學を包含する思想界は、佛教に由りて第一原理的に導かれ、儒教は單に政治及道德即日常生活の平庸なる軌範を説くに過ぎずとせらる、(教の)卑近常識門と視做され、高遠なる(靈動的)信仰門は之を佛教の獨占に委したり。道家思想に至りては時々の一服清涼劑として扱はれしに過ぎず。されは人間の爲に宰令の實在への道を開き眞安心を與ふるは佛教の外なしと云ふもの、新羅人一般の思想なりと斷すへく、而して思想は直ちに高麗の末期朱子學の官學となる迄に及へり。

高麗朝思想史

高麗朝の思想か開國の君主太祖王建の個人的思想並に教政の方針に由りて導かるへきは言を俟たす。而して太祖其人の武人出身にして格別の學的素養に富める人に非ざるか故に其の思想の淵源畢竟新羅の傳習を承くること亦言を俟たす。即佛教を以て宗教とし儒教を以て政治道德の規範となし、兼ねて種々の鬼神教に由りて禳災招福せんとするなり。

(△上面：△高麗佛教は大覺國師出てゝ新に天台宗を開立し教界の統一を劃する迄は、略新羅佛教の延長と視做すへし。(故に)之を國初の佛教と命す。)

第一章 太祖と佛教

〔國祚の存廢と法力〕

前述の如き崇佛を以て一貫せる新羅か終に佛菩薩に見離されて國祚祀らざるに至~~れる~~（り、高麗之に代りて世代を創くる）重大事實は、新羅君臣側と高麗君臣側とより二様の（相反する）觀察をなすべし。即是事實を以て、佛の法力の^{なればかり}其實國祚擁護に何許も恃むに足らず、國家の興廢は佛力以外他の重大なる原因あらざるへからずとなすは、新羅君臣にして、佛の法力頼るべし、（誠）信疑はされは感應~~なり~~（あり）、新朝の成立は佛の裨補に依ること多し、佛益々崇奉せざるへからずとなすは、高麗君臣なり。

高麗太祖は、佛の法力及鬼神の威徳は冥々の裡に國祚の存廢に關すること大なり、故に佛儀と祭神とは國家と重要國事なり、君臣苟も怠るへからずと信せるか如し。太祖の家世に佛教を信し、王建其人亦堅固なる佛教信者なりしことは、種々の事蹟に照して疑ふへからず。前述『麗史』所載の王氏と道詵との神秘的物語は~~縱令（果して其）事實の（精密と）有無疑へきも相當上世の作爲に出る（より既に傳へられたる）のみならず恐らくは道詵と王氏の父祖との間に何等かの因縁關係ありて王氏か道詵を名（高）僧禪僧として崇尊せる事實ありしこと疑なきか如く~~（上面：縱令物語の全部か精密に事實なりとは信すへからざる也縱令後代王者興起の迹を神秘にすべく偽作せるものなりとすべし。由りて以て王氏一家の佛教を信せる~~案~~を證するに足る。今予は更に進んで太祖其人を崇拜し、其の説く所の風水地理説を信受せるものとなす〔補閑集太祖と崔凝との談話中、太祖の朝鮮土性の説參考〕。尚後説。）

〔遺訓〕

『高麗史』に記する所、太祖其廿六年に大匡朴述希に親授せる遺訓なる者は、嚴格なる史實と

しては疑あり或は之を（世に）出せる姜（崔）~~沆の偽作ならざるかを思はると雖、然れども少くは姜沆に由りてと雖、然れども其上世、崔沆（〔成宗朝撰史の任にあたる〕の家より世に出たされ、當時之を尊ひ又高麗の教政の本訓條に則れる所のもの少からず。故に本訓條の思想は之を高麗朝建國施政の方針として視做すへきものありとす。其中第一條~~

「我國家大業、必資諸佛護衛之力。故創禪教寺院、差遣住持焚修使、各治其業。」

は、太祖の佛と國祚との關係の根本思想を道破せるものにして（△上面：△太祖の眞意は兎に角表面施設は斯の如し。）

高宗朝文臣崔滋の『補閑集』に載する所（太祖と）參謀崔凝との談話に

「我國山水靈奇介在荒僻、土性好佛、神資福利。方今兵革未息、安危未決。旦夕栖遑、不知所措。惟思佛神陰助山水靈應、儻有效於姑息耳。豈以此爲理國得民之大經也。待完亂居安正、可以移風俗美教化也。」

とあると照して明なり。斯くて太祖は新羅の例に循て燃燈・八關の二齋を以て國の大法式となして以て佛に祈り鬼神に禱り、其外諸宗の僧侶の名ある者を致して之を優遇し、丹精を抽て、高麗の爲に福利を修せしめたり。

但し太祖の佛教外護は、獨り其の個人的信仰と國祚裨補の爲なるのみならず、○（強調か）由て以て人心を收攬して新朝の國基を固めんとせるは想像するに難からず。

蓋し佛教は新羅の國教にして、其の教理の民心に浸潤すること最深く、僧侶の言説の民信を動かすこと極めて大なる、言を~~誅~~たす。而して新羅末季、政綱弛廢して四方平かならず盜賊横行し、僧侶も早く望を朝廷に絶ちて足を^つ裹みて王京に向はんとせず〔一例、光宗十六年李夢游撰靜眞大師碑（洞眞大師碑、廣慈大師、法鏡大師）〕。太祖立つに及ひ百里中使を遣して山中高德を召し~~或~~

は戰陣の途次枉駕其の高居を誘ふ、以て太祖の爲に國祚を祈り、廣く民衆に向て新朝の佛護を得て宜うく三韓の聖主たるべきを宣傳せしむ。

〔王師・國師〕

太祖の佛徒優遇の中、最顯著にして佛徒の位地の向上を成せるは(羅代に引續きて)王師・國師の極位階を設けて(以て)常置の僧階となし、遂に以て麗朝の常憲となせる一事なりとす。

即太祖は其一年早くも法鏡大師慶獻か清源派の雲居道膺の心法を得て天佑五年[孝恭王十二年]歸國し、亂世を避けて山中に窶坐せるを迎へて王師となし、其の四年に寂するや、同門の眞澈大師利言を以て第二世王師となし、利言遷化するや、眞空大師忠湛を以て第三世王師となせり。

案するに、僧侶に國師あるは、支那北齊の僧法常、寂後國師を追贈せられしを始とす。(存命中の國師は多く之を聽かず。)新羅に在りては佛國王の師として禮遇せられし者、今日の(傳はる)碑文に就て檢するに洪陟の興徳王及宣康太子の師となり入。(に由りて師と)せられ、又智證大師は憲康王に由りて師とせらる。眞鏡大師は景明王の師とせられ、無染禪師は景文王憲康王の爲に師とせられ、又梵日大師は景文・憲康・定康の三王より國師の禮を以て聘せられしか、遂に山を出てす。又愍哀王は眞鑑大師を迎ふるに師禮を以てせるか、亦雙谿寺を出てす。斯の如く新羅の崇佛王も師となせる僧侶なきに非さりしも、常置の僧階たりしには非らず(さるか如し)。又碑文ては支那に倣て國師と記して王師と記さず。國師の外に王師を設け歴代常置の僧階となせるは、高麗太祖に至りて始まりしか如し。

太祖の信せる宗派は禪宗なりしか如し。蓋し前述の如く禪宗は新羅に在りて最新宗派にして、他諸教宗即華嚴・律・法相・三論・密教等の既に宣布せられ(て盛に行はれし)是土に新に地盤を開けるか故に、其の大師等も意氣潑刺と

して多く新歸朝の名匠たり。

新興宗派の元氣に富み殊に其の宗義、單力的にして武人たる王建に適し、又たま々如哲禪師なる道誥の法を嗣ける偉材ありて夙に王氏の皈依を受けしあり、終に王建をして自派の人たらしめしなり。(故に)前述太祖の王師は皆禪宗の僧たり也。外太祖か文臣に命して撰文せしめて豊碑を建てしめし禪僧に大鏡法師麗嚴・朗圓大師開情・先覺大師迥微・眞空大師・法鏡大師元暉・廣慈禪師・洞眞大師慶甫・靜眞大師競讓・元宗大師燦幽・通一大師、十師あり。

〔太祖と道誥との關係〕

茲に太祖と道誥との關係に就て一考察を試んとす。

太祖の道誥を尊信せるの事實は之を認めざるを得ざるは前述の如し。而して太祖は道誥に面會せりや否やは(るの事)傳説を(は之を)信すへく餘りに荒誕なり。但た何人か果して太祖に向て道誥の神蹟靈迹を語りて太祖を(して)信せしめしかの者なかりしかを尋ねざるへからず。太祖は上述禪家三(三王師)十大師外如哲禪師なる者を尊崇して其の神怪なる説に傾聽して以て大に禪門を盛にせり。其は李奎報の(撰せる)「大安寺談禪勝」に

「由是、我太祖大王、因哲師秘要、崇信宗門。及大關五百禪宇、闡揚心法、然後北兵自退却、無復寇邊。然則禪之利於世也、可勝道哉。」

とあり、又同人撰「甲午年談禪日齋疏」に

「昔達磨得師子比丘之默傳、耀佛燈於中土。我藝祖因如哲大士之密諭輟禪、軌於三韓。有國綿遠而式克至今。」

とありて亦之を復(證)す。是れ恐らく當時禪宗内に傳はれる故記に基くものにして信憑すべきものと認むへし。

而して乾統六年即睿宗元年李預の撰せる「三角山重修僧伽窟記」に禪師領賢を遣して其の重修を総管せしめしを記し、同時に領賢禪師の法

系を述へて

「賢師、是新羅代窟主禪師如哲所創神穴寺先祖王師子膺之法胤也。」

と云て如哲の禪宗なる（にして羅代三角山僧伽窟主なりし）を證す。

案するに哲は普通禪僧と其の行蹟を殊にし、僧伽の深窟に住して往々奇蹟世を駭かし、彼の道誥の流を斟める所謂神僧の部に屬する者なり。而して（前引）彼か種々の秘要を述へて太祖を動したりと云ふは、或は道誥の遺訣と稱して誥けたるに非ずやと思はるゝは、前述太祖の遺訓の内に

「諸寺院、皆道誥推占山水順逆而開創。」

とありて、太祖の禪宇開創處は道誥の秘訣と稱する者に從へるものと見らる。（◎上面：又『益齋集』「重修開國（律）寺記」に

「恭惟我太祖、既一三韓有利家邦事無不舉。謂釋氏可以贊理道化暴逆不氓其徒。俾闡其教、凡立塔廟、必相山川陰陽逆順之勢。要有以損益壓勝者然後爲之、非如梁氏畏慕罪福求媚于佛也。都城東南隅、其門曰保定…〔其路自楊廣・全羅・慶尙・江陵四道、而來都城者、與夫都城之之四道者、憧憧然罔晝夜不息也〕…有川焉、城中之水、潤溪溝澮、近遠細大、咸會而東。每夏秋之交、雨潦既集則崩奔汪濊、若三軍之行。吁可畏也。有山焉、根乎鶴峰、邈迤而來、若頰而起、若鷲鷲而止、猶龍虎之變動而氣勢之雄也。世號斯地爲三鉗。豈以是哉。清泰十八年太祖用術家之言、作寺其間、以處方袍之學律乘者、名之曰開國寺。」

とありて、専ら道誥の風水説に循て寺刹の開創をなせるを證す。）

而して其の秘訣を述へて太祖をして實行せしめし者は（『益齋集』の所謂術者は）如哲其人なり。果汚然らば、道誥と如哲とは法脈に於て如何なる關係に在りや。（二師共に禪宗たる外には）惜矣哉、今徴すへき資料を缺くと雖、太祖創業當時地理風水の怪僧、僧伽窟主如哲禪師なる者

ありて、巧に道誥を借りて太祖を動かし、太祖の皈依を得（太祖をして）種々興禪の事業をなさしめたることは疑ふへからず。或は尚進みて、王氏と道誥との神秘的關係の物語の如きも實は如哲の案出に係る、太祖遺訓の資料も如哲の説に源くものならずやとも思はる。

而して如哲は長生して太祖・惠・定・光・景・成宗の六王に歴事して何れも能く皈依を得たるは、成宗元年國老崔承老の國弊を論する有名なる長疏中に

「伏見聖上、遣使迎屈山僧如哲入内。臣愚以爲哲果能福人者。其所居水土、亦是聖上之有、朝夕飲食、亦是聖上之賜。必有圖報之心、每以祝釐爲事。何煩迎致、然後敢施福耶。」

とあるに徴すへし。哲は是時江原道（襄陽？）堀山に住せるなり。

哲は實に裏面に活動する怪僧にして一般禪宗の以外的手段に由りて人主の心を捉へ、能く初期麗朝をして（に在りて）禪宗を盛ならしめしこと疑ふへからず。されは、太祖より成宗頃迄は高麗禪宗は醇禪の老師として其人濟々として多く輩出せるに尚又此の怪僧あり、宗勢最振へりと想像せらる。

二 他の宗派（〔本節省講〕）

高麗國初の佛教宗派は禪宗の外、華嚴宗は新羅以來の宗勢を維持して能く禪と拮抗す。光宗朝の王師坦文は即華嚴宗なり。爾後歷朝名僧輩出し宮中の皈依淺からず。

律宗も新羅以來、僧侶の受戒の儀と相須ちて、引續き高麗に官壇設置の律寺ありて宗勢衰へず、太祖は其十八年開城の鎮護として保定門に開國律寺を創め授戒官壇を築き、又靈通〔開城〕・嵩法・普願〔伽倻〕・桐華〔大邱〕の四の寺にも戒壇を築けり（置けり）〔麗史靖宗二年〕。

密教は元來祈禱宗にして特に國家及古人の禳災に神效ありとせらる。『三國遺事』卷五明朗神印

の條には、太祖創業當時、海賊の來擾あるに當り、新羅の有名なる密教大德安惠明朝の法孫廣學・大縁二大德をして作法禳鎮せしめ、因りて開城に現聖寺を立て、密教の根本法堂となす。大縁は前名善會にして光宗も甚た之を優遇せり。外に開城の鎮山天磨には摠持巖院、母岳には咒錫院ありて亦密教の道場たり。

慈恩宗は重に瑜伽宗と呼ばれ、麗朝に至りても教宗中の要宗として榮えたり。顯宗か安宗及妃の冥福を修する爲に、開城玄化里に營める玄化寺は本宗の大刹たり。國初の王師慧炤・智光・慧德は皆本宗の僧なり。

是等の外、淨土念佛宗〔智異山水精社〕〔權適：東文選卷 64〕は、~~法~~・小乘有部亦一宗として存在せり。〔河千旦撰小乘宗首座官誥〔東文選卷 27〕

斯の如く高麗國初、一宗として認められしは禪宗・華嚴宗・律宗・法相宗・密教及小乘有部宗の六宗なりしか如く、是の外の宗派としては史乘見るべきなし。而して是等六宗の僧侶の宗學として學修研究する所の學は（文宗の王子）大覺國師義天の墓誌銘に據れば

「當世之學佛者、有戒律宗、法相宗、涅槃宗、法性宗、圓融宗、禪寂宗。師於六宗、並究至極。」法性宗は『起信論』~~圓覺經等を所依典となす~~、（~~眞如~~）法性を（『攝論』等の學を）謂ひ、圓融宗は即華嚴宗なり。禪寂宗は即禪宗なり。但し是六宗は何れも大乘に屬す。小乘有部宗學・淨土學の如きは是外と見らるへし。

第二章 高麗の僧階

太祖の對佛教觀念は爾後歷代君臣に由りて繼承せらる。即佛教は國祚裨補（國家の爲に）禳災招福の重大作用者なり。單なる死後修福の超（出）世間的教法には非ず。是の思想を尤明白に顯せるに國定の所定の僧階あり。僧階の極上は王師・國師にして其の基礎は僧科なり。但し國初

に在りては尚新羅の僧階を襲用²⁵し、前述坦文王師の碑文には大德・別大德の法階を受け、大鏡大師碑銘裏面弟子名に政法大統・尹然大德あり。而して成宗朝に至りて既に高麗僧階を授與せり。従て高麗朝の僧階の制定は光宗朝僧科制定後に至りて制定せられしと見るへし。

〔僧科〕

朝鮮（半島）に於て僧科の施行せられし濫觴に付ては、史乘明記するなしと雖、諸種の資料に據りて判斷するに、高麗の各宗門少くとも最大宗門たる華嚴宗にては選佛場を設けて此に宗門大德か宗内青年僧の學力を試みしは太祖當時既に之あり、或は新羅時代にも之ありしに非ざるかとも疑へとも今證據なし。只た新羅の元聖王既に唐制に倣つて讀書出身科を定むるあり。僧侶の大選は實に士人の出身制に模せるか故に之に倣へる選佛場も、或は案外に上代に溯るか、知るへからず。太祖か華嚴宗の秀才坦文の名聲を夙聞して僧選に應せしめしは、實に龍德元年即新羅敬明王五年太祖即位四年なり。但し是の僧選は單に嚴宗の私設僧選にして國制の僧科には非すと見るへし。

降りて顯宗十六年崔冲の撰せる（禪宗）圓空國師智宗の碑には顯德の初、光宗大王の僧科を置きしを記す。顯德は成光宗の五年より十年に至る。光宗は其の九年支那人雙冀の進議に原きて、支那制度に則りし略形式を備へる科擧を設けて進士出身を取れり。顯德初の字稍や襯せすと雖、大體に於て僧侶側より請願して士流の科擧に準して僧科を設けられしものと見るべきか如し。文宗八年高聽の奉教撰に係る華嚴宗「浮石寺圓融國師の碑」文には師廿八歳即成宗十年僧科に應じて大德に進むとあり。此頃既に僧科の僧侶登龍門たりしを證す。

然れども初には僧科を施行するに定期なかりしか、宣宗元年に至りて終に僧侶の請に依りて進士の例に従て三年一選となす。僧科の制、苟も僧階

を得んとする者は、此關門を通過せざるへからず。但し王子王族乃至勢家の子弟の僧たる者は必しも然らざるか如く直に高階を授けられたり。僧科本試の前、各宗談法會を設けて豫め選擇を行ひ、之に合格せる者を開城に送りて本試に應せしむること文科と同じ。僧試場に臨場する者、中使あり證官あり碩徳あり。中使は宮中の使者、證官は朝廷の官吏、碩徳は試僧なり。故に中使・證官は試験の公平を監督する者なり。

【僧階】

（僧階に禪・教二種あり²⁶。教宗階は先つ）僧科に合格して初授の僧階を大徳となす。上りて大師なり、次上を重大師、次上を三重大師、以上首座僧統となす。是れ教宗の僧階なり。禪宗に在りては三重大師迄は（教宗と）同名なるも以上禪師・大禪師となす〔海麟國師碑銘、圓眞國師碑銘、其他教宗僧侶の碑銘〕。教宗と云ふは律・華嚴・法相・小乘有部の四宗にして、禪宗と云ふは禪宗及密教の二宗なり。惟ふに密教は眞言秘密を教義と立て普通の文字を超越する立前なるか故に、之を禪宗に編入せるなるへし。後大覺國師か新に天台一宗を開立するに至りて亦禪宗の僧階を取れり。（△上面：△大徳の僧階には法號伴ひ、階の進むに従て法號亦加はる。）

僧階の絶頂は國師及王師なり。此に到れば位品大臣の上に在り、王の師禮を受く。宣勅を齎し、赴く者は亞相の大臣なり。例に依れば、直に封を受けず、再命三命を経て始めて之を受く。中には五辭に及ふあり。

『高麗圖經』は高麗僧侶の事を記するに於て愆謬多し。王師・國師を叙するや王師を以て最高位となせり。然るに實は國師反りて王師の上にシテ僧階の極上なること『李相國集』卷三十四「諡圓眞國師教書」に「夫王師者、特一王之攸範。國師者、迺一國之所資。」

とあるに徴すへし。（◎上面：◎外に普覺國尊一

然の碑文及無極混丘の益齋撰碑文〔有元高麗國曹溪宗慈氏山瑩源寺寶鑑國師碑銘〕に證あり。）故に王師都城を離れて藏修の山寺に歸臥するときは、即國師に進むるを例とす。要するに一言以て之を言へば、國師は在野の王師にして、王師は王の側に在る國師なり。

新羅時代、亦王師の優遇を受し僧の少からさりしは前述の如し。然れど新羅の王師は單に國王の法師として尊崇するの義にして、高麗の如く僧侶の位階とは視るへからず。従て常置の性質に非ず。其人なければ、之を缺く。然るに高麗王師は然らず。宛ら官吏の大臣大將の如く職階の一種なるか故に、尋常の僧階を歴陞して名望ある者は當然之に到る。是れ列王必ず王師をおき、名僧必ず之を授けられし所以なり。

（案するに）僧階は僧科を本とす。僧科は士民文武科擧に倣へるなり。官吏か科擧に依りて登用せらるゝと同じく、僧侶も僧科に由りて登用せられて一ヶ寺の住持となりて國家の裨補の職を盡すへきものとす。官吏は政法に由りて以て陽に國家治平・人民康寧の業績を擧げ、僧侶は法力に由りて以て陰に國利民福を進む。されば官法と教法とは政治の表裏陰陽にして、二者相須つへく、其の一を缺くへからざる所のものなり。（△上面：△

崔承老上時務書〔東文選卷五十二〕に佛弊を擧げて當時麗朝の歴王は法事と政事を視るに二大國事を以てし、法事に列して政事を廢するを常例となせり。承老は之を不可となし

「請以一年十二月分半。自二月至四月、自八月至十月、政事功德、參半行之。自五月至七月、自十一月至正月、除功德、專修政事。逐日聽政、宵旰圖治。每日午後乃用君子四時之禮、修令安身。如此則順時令安聖體、減臣民之勞苦、豈不爲大功德乎。」

と云ひ、尚一年中の半期には政事と法事即功德とを參半して當（視務）するを以て國王當然の

生活となせり。政教一致、深然とし不可分なる思想、掲焉として明白なり。）

若し國家に大事あり、文武官員の力を盡して尚救ふ能はざる場合には、即僧侶の法力を頼むの外なし。是れ國家か僧侶の待つに略ほ官吏同様なる方待（法）を以てすへき所以にして、又國家に大難生ずる時、愈益僧侶か國王四民より力と頼まるゝ所以なり。

事は顯宗朝契丹の侵（入）寇、高宗朝蒙古の侵來當時に於ける大藏經板鏤刻に見るへし。是れ新羅高麗の歴代佛法及僧侶に對する一貫する觀念にして、而して佛教か高麗宮廷と密勿なる關係を締して其の深甚なる庇護を受け、王子公孫争て圓頂黒衣の群に投し、英才濟々として輩出し、其極晩年の如く怪僧辛旽なる者出て、黒衣宰相として政權をさへ掌握するに至れる張本なり。

第三章 高麗の漢學と科擧

前述の如く新羅時代（國家は）儒教を視るに道德及政治の規範を垂るゝものを以てし、苟も士として治民の地位に立つ者は必ず儒學を修めざるへからず、國家設置の學校は即儒學を教授する所となせり。従て儒教の普及發達、一定程度に達すれば、必ず國學設けられて之を天下士類の子弟に教授し、國學の發達（一）定程度に到れば、必ず科擧制度建てられて儒學を以て（國家）試験を舉行して士類出身の途となす。

新羅國學は神文王二年に建てられ、其の制度課程畧ほ唐制に模し、後百年元聖王四年に至りて始めて讀書出身科を施行し、専ら唐科擧の明經科に準して五經三史（上面：易、書、詩、春秋、禮／史記、漢書、後漢書）を以て試し三品を取る。國學建てられ科擧はるゝに至りて、儒教の國家政教に對する支配權牢乎として動かすへからず。同時に漢學文化の發達亦經年愈々進む。

されは新羅の秀才にして進むて（萬里の木道を踏みて）唐土の賓興科に應して及第し、名を彼土科擧に垂るゝ者長慶の初〔憲德王代〕金雲卿なる者を先導となし、爾後唐末に至る迄五十八人を數へ、五代梁唐、卅一人と數へらる。崔致遠は即其の翹楚にして乾符元年及第し、擢用せられて唐の翰林學士となる。然れど新羅國學課程は經史文選の訓詁を主とし、科擧亦明經讀書科にして、猶未だ唐土科中の最（精）華、進士製述科を設くるに至らず。

高麗太祖は開國創業の主として教政に在りても舊國の民心の（收攬）安堵を第一策となせるか故に、（最）力を佛教の外護僧侶の名僧の招邀に用ひ、學制の更新・學校の増設の如き儒教側の作振に着手するに至らず〔『東國通鑑』太祖十四年皇龍寺九層塔に倣て開城に七重塔を立るに懸けし史論參考〕。然れど太祖と雖、全く儒教漢學の奨進に意なきには非ず（故に）（さること）、『高麗史』太祖贊、穆宗六年春正月の教書、『麗史』選舉志の記事等に見ゆるか如し。或は重儒道と云ひ、或は大開庠序と云ひ、或は道建學校と云ふ。是れ太祖の學政の方針の在る所を言へるものと解すへし。之を（か）實施（に着手）せるは光宗にして學制の完成を見しは成宗朝なり。（◎上面：◎其迄は新羅の制を襲へるものと解すへし。）

高麗の學制は新羅よりは一層善く唐制を寫せるものにして、中央管學機關は國子監あり、國子學・太學及四門學の（三）學を設け、身分の品等に從て子弟を取り、夫々の學官博士をおき、外に雜業教授の律學・書學・算學をも國子學に附設す。地方十二牧には夫々庠序を設けて（學田をおき）、中央より經學博士、醫學博士各一人を派遣して其の教官となす。

高麗學制の制定と前後して〔恐らく其の前〕換言すに、光宗九年には支那（後周）人雙冀の建議に因りて（一層より唐制に模したる）高麗科擧制度を立て之を實施す。科目は詞賦及時務策の

進士科と經書讀誦の明經科及醫卜の三種なり。
(始は逐年之を行ひしか、後)三年大比の古制に則りて式年毎に舉行となす。

是に至りて科制並に學制、共に唐制を完全に模倣し、愈々朝鮮は小中華の實を備ふるに至り(へ)、支那國家及國民の(政治經濟及性情に於る)利弊共に之を受くるに至る。例へは學風を功利的にし(て専ら應科の爲に修學し)、尚文と共に文弱に陥らしめ、學問を以て士類階級の獨占となし、文化の普及を遮障せるか如しし、文學は獨り貴族文學にして平民文學終に興らざるか如し。(△上面：△殊に李朝中世以後、道學益盛に汙士流向學の途二岐に分れ、道學者反りて文學の士に軼くるに至りて、道學者の間科擧を以て名利の途にして、人心を毒し士風を浮薄にし、俗習を擧げて利窠に投ずるものとなす論、大に興る。然れども是れ畢竟所謂一邊の論なること言を俟たす。)

製述科、立てられて高麗の詩文駸々として進む。當時の知貢官は雙冀・王融の二氏之に膺る。二氏共に浮華綺靡なる四六儷體を善くす。故に未だ(唐の韓・柳に源する)古文體、興るに至らず。

案するに朝鮮の詩文體の變遷は支那の同時代に比して常に一時代晩るゝを例とす。新羅時代に在りては尚唐代の詩文體の流行を見るに至らず、國學に於て教科書として『文選』を課し、學者の詩文亦一に六朝駢儷綺麗體の外に出ず。崔致遠の豪傑の資を以て『桂苑筆耕』の収むる所皆然り、他の作家は言ふに及はず。高麗の盛大となるに至りて漸く唐の詩文體學修せられ(仁宗朝の)鄭知常・金富軾二氏の如き既に顯著に羅代の詩文と(其)體を異にす。以下代を下るに従て愈々(韓・柳の)眞古文高麗に行はる。

而して²⁷未滅ひ元となり高麗完全に其の(元の)屬國となるに及びて、程朱の宋學輸入せら

れ、同時に宋の文體亦模倣せらる次て李朝となるや(大體論として)擧世詩文共に宋を學ひ、文に歐陽脩・朱子、詩に東坡・山谷・放翁を模倣す。故に李朝諸家の詩格、高麗に比して降るを免れざるも、文は即高麗に軼くと稱せらる。李朝(盛世漸く明文の影響を見)中葉以後清朝の正朔を奉するや、明代の學問文章の影響を見る(詩文鮮彩を力む)而して清末に至りて潜流的に清代の學術朝鮮に浸灌し詩に在りても王漁洋の(翁方綱の²⁸)影響の下に唐聲宋理を以て典型と立つ。李朝末期の詩人の作皆之に則る。

高麗大學課程を新羅の其と比較するに最重要なる差異は、前者に在りては『文選』を廢し、専ら經書を教授することゝなせるに在りとす。即睿宗四年には太學に七齋を立てて『易』『書』『詩』『周禮』『禮記』『春秋』の六經と武學を修むる七種學生の寄宿舎となし、後仁宗武學齋を廢す。六經の外『論語』と『孝經』とは一般に學修せしむ。仁宗之(主義)を大學式目に現し、其九年には進んで學生の老莊學を治むるを禁せり。

後顯・德・靖・文宗四王に歴任せし(累代の儒宗)崔冲か顯宗以後、干戈纔に熄みて文教未だ恢復せざるを慨し、私學堂を開いて學徒を教ふるや、九齋を立てて授くるに九經三史を以てせり(上面：易、書、詩、禮、(毛詩)春秋(左、公羊、穀梁)、孝經、論語、孟子、周禮)。是の如く高麗國學及私學に在りて經學を重注せるに拘らず、科擧に在りては(◎上面：◎(原則として)進士・明經を對等の二大科と立てなから、其實)亦等々支那の先蹤を追ひて製述科専ら尊はれて、明經科は有勢なる士流子弟は之に應するを^{いさぎよ}屑しとせざる風を早く馴致せり。

柳邦憲の墓誌に記するか如く、光宗の晩年には既に進士科を尚ふに至り、進士科に應する者の數、遙に明經科に過るか故に進士科及第に甲乙丙三科を許し(置き)明經は始後更に同進士迄作るに至り、明經科は索然として始終唯一

科のみ。

而して是の傾向を促進せるは、王融其人なりか如く、光宗十七年其の雙冀に代りて知貢擧となるや、前後十數回、只た進士を取りて明經を取らず。是に於てか明經は進士に拮抗する能はず、麗朝種々科制に關する重要なる施設も主として進士科を對象として企てらるゝことゝなり、太學生も居常、力を製述に注ぎ經學を忽にし、麗朝立學の精神を發揮せざるに至る。是風は李朝を通して些の變化を見ず、其の李太王甲午年大改革に廢止せらるゝ迄、明經科は専ら邊陲地の讀書士乃至郷儒の應する所の科となり。之に好吉（なれり。）

第四章 高麗儒者の佛教觀

高麗國初、新羅の漢學を承けて之を高麗に傳ふる者、先つ（崔致遠の從弟）崔彦擣を推すへし。彼は（羅朝に在りては崔仁滾と稱せり。）慶州の崔氏、世々典文の家なり。太祖登用して太子師傅となし、内外製翰の任を委し、一時の縉紳の子弟皆之に師事す。當時王命に由りて建つる碑銘の撰多く彼に需つ。（後、成宗朝國史を修せる）崔沅は彼の孫なり。又有名なる萬言疏を成宗に上れる崔承老亦一門の人なり。

彼等に次て名ある儒學者に蔡忠順あり前述王融あり、表文に巧にして遼との外交に功ありし朴寅亮・金仁存あり。靖宗文宗兩朝の丞相崔冲は海州の人、私學を建てゝ大に文教を盛にし、門徒振々、當代稱して東海孔（子）と云ふ。然れど是等國初及盛代の漢學者等の著述は今傳はる所のもの甚少し。唯た若干碑文及詩文（と數篇）『東文選』に収めらるの數篇の詩文の見るべきのみ。

是時代の漢學は（諸經の）訓詁に於て註疏に據り文に於て唐文を模し未だ性理心氣の哲學的見解（○上面：○即道德の根源人性の問題より進

みて宇宙觀人生觀に説及する講究は未だ彼等に由りて從事せらるゝに至らず）を學論するに至らず。依然として新羅時代の漢學の前軌に循る。

されは當時の漢學者の思想及信仰上より佛教を觀る、亦羅代の儒者と共に節を合す。即哲學及宗教、即人の思想信仰を最高度に統制して以て人生々活に理想と安易（心）とを與ふる教としては佛教を以て唯一無二となし、儒教は只た平庸なる人倫と政治の規範を説く者と看做せり。實に當時儒學の哲學的方面の開拓なきに對して、佛教（側）は新羅の佛敎學を承けて禪・敎大乘諸宗争うて其の宗學を發揚し、各深遠高尚なる哲學を其の敎理に有し、名僧知識輩出して盛に之を提唱講演するあり。

加之に高麗王家は歴代佛に皈依し、庇護到らざるなし。僧階（職）の極地の座席、實に大臣の右に在り。是に於てか國初以來、漢學者と稱し儒者と稱する者も殆ど皆、佛教を以て深き哲理を説き、儒教を以て淺き倫常を説き、佛教は精神（信仰）界を支配する者、儒教は物質政治（事功界）〔現象〕界を支配する者と承認せざるはなし。

故に前擧崔彦擣は數多き僧侶の碑銘を撰せるか、撰者の姓名、漫漶して讀むへからざるも、（亦）彼の作に係ると推定すべき長湍「五龍寺王師法鏡大師普照慧光塔碑」の裏面、門徒の列刻に彼亦其名を陳ねたり。又幾度か知貢擧に任せられ一代漢學界の領袖たりし李夢游は、光宗十六年乙丑奉敎して撰せる聞慶「鳳巖寺靜眞大師圓悟塔碑」には其の冒頭に佛教を贊して以て三界中最上大法となし、佛教徒か（偽造せし）²⁹孔子か釋迦³⁰聖人西方に生ると言ひしと云ふ傳説を引用せり。前述崔承老萬言疏は（侃々）諤々の議を以て當代の政弊害を切言せるか、而も（佞）佛迎僧の謂はれなきを言ひながら佛教と儒教とを並へて、佛教は是れ修身の本にして來生の資、儒教は理國の源にして今日の務なる

ことを承認せり。

大儒崔冲其人さへ、王命に因り原州「居頓寺圓空國師勝妙塔碑」^{三〇}（を撰し、又）稷山「奉先弘慶寺碣記」とを撰文し、圓空國師の碑文に在りては甚しくも師か支那留學より本國に還れるを以て孔子の天下を周遊して晩年魯に回れるに比況し、又「弘慶寺碣記」には夷然として彼か平居内典に親めるを述へたり。彼も若し之を李朝儒者を知らるれば、崔致遠同様、佞佛儒者の譏を免れざるなり。又顯宗朝の文臣にして宋の歸化人なる周佇の（撰せる）「玄化寺碑」文には、先王の追尊の禮と占陵改葬の儀とは儒教の典に従ひ、今其の來生の冥福を修するに當りて佛教~~を~~の式を用ふるを述へ、又當時の學者一方の棟梁蔡忠順の「同碑陰記」には、一層力強く一層明瞭に儒・佛二教々義の外に現るゝ所の相異りと雖、一源の眞理を探れば相融通せざるに非ず、只た佛教は精神生活の内部を教化し、儒教は人間生活の外部を率ゆと云へり。

儒者既に斯の如き兩教觀を懷か故に、佛徒側に在りては尚一層自持すること高く、遙に儒教を眼下に見るは勢の當然なり。彼の文宗王緝（子にして）一代の才人、大覺國師義天は「與内侍文冠書」に於て、佛教は其の教理の高遠にして教主の人格偉大なる、到底儒教等の企及すへき所に非ず、儒教は只た當に淺薄なる平庸なる道德を尋常人に向て説くへきのみ。實に儒教の説は佛教に在りては纔に其の初乘乃人乘に過ぎず。是點に在りては反りて~~道~~老莊に劣れり。老莊は佛教の天乘迄看到りたれば^{三一}なり。然るに佛教に在りては天乘の上に更に聲聞乘・緣覺乘・菩薩乘のあるありと。

高麗に宋學の將來せられて儒學の哲學的方向か講究せらるゝ迄の儒・佛二徒の二教觀か此に落著するは理の免れざる所なり。されは儒者側より學的にして積極的なる排佛説の唱出さるゝか如きは到底期待する能はざる所。斯の如きは朱

子學興り國學振へる國季に待たざるへからず。

第五章 高麗の風水説

~~前述~~道誥の風水説は麗祖と彼との不思議なる因縁を締せりと傳へ信せられしに由り（其か）高麗朝に至りては益々廣く深く信受せられしは前（怪僧）如哲の彼の秘訣と稱して風水説を以て大に臘朝（國初）歴王の尊崇を博せしに由りて（は前述）の如し。

實に風水説は科學的には何等根據なく一種神秘的假定の下に成立する迷信に外ならざるに、高麗朝君臣上下の之を信奉すること強烈にして爲に（定宗の如く圖讖を信シテ都を◎上面：◎平壤に遷さんとし、文宗は楊州即漢陽に南京を築~~キ~~キ、其極、仁宗朝には）國家の大亂まで起すに至れり。吾人か今尚朝鮮人の生活現狀に於て是の思想の上下に流行し、機會あ~~れ~~は種々の形に於て具現し、或は政治問題或は社會問題或は宗教問題を惹起するを屢見するは、其の（淵）源遠く既に麗初に在り、長年間傳承し培養し來れるものなり。今其の大略の史實を述へんとす。

【地理擇地の專職】

如哲等の（道誥秘訣と稱して風水説の）鼓吹宣傳に因りて麗朝には既に國初より地理を專業とする僧侶を生するに至れり。其の或は新羅時代にも既に存するかも測られざるも、予の知~~る~~限の文獻に在りては高麗國初以上に溯るものなし。即惠宗元年甲辰 [九四四] 建てられし長湍に在る太祖第一世王師「（法）鏡大師普照慧光塔碑」の裏面に本建碑事業に關係せる僧俗の名を刻する中に

「專知地理事大德聰訓」

とあり、聰訓は當時大德の僧階を有して地理業に精通し爲に（命を受けて）王師建碑の位地を相定せるものなり。

下りて太平二年顯宗十三年 [一〇二二] 文臣蔡

忠順、宣教を奉して撰せる「大慈恩宗玄化寺碑」に安宗の王妃の陵を定むるを記して

「臣等上册諡曰獻貞王后。復命太卜監、選地口葬。果得吉地於京城良方、備禮葬焉。陵號曰元陵。」

とありて、是頃既に朝廷に地理擇地の専職太卜監をおけるを證す。尚碑陰記恩賞を記する中に「地理業三重大通鄭雄、重大通金得義、等各加恩澤有差。」³²

とあり、三重大通・重大通は恐らく是等(所謂)雜業者の位階(の稱)なるへし。高麗に在りては文武階及散職を通して正一品を三重大匡、從一品を重大匡と稱す。三重大匡は地理業者の第一品爵名、重大匡は第二品爵名なるへし。

高麗の制度に准せりと惟はるゝ李朝制度に在りても雜職は同一階にして文武階と爵名を異にす。『大典會通』原典卷一雜職に正六品供職郎・勳職郎、從六品謹任郎・效任郎と記するか如し。

[文武階正六品承議郎・承訓郎、從六品宣教郎・宣務郎] 是に由りて地理業の三重大通・重大通は雜職の爵名と判断す。

鄭雄及金得義の僧侶ならざるは姓を稱するに由りて明白なり。此頃既に地理業専職(門)雜職官吏のおかれしを證す。恐らく地理は他の樂學・兵學・律學・字學・醫學・吏學等と同しく其の官立教習所ありしなるへし。『高麗史』卷七十七諸司監各色に恭愍王十年、十學教授官をおき諸署に分屬せしめ、風水陰陽等の學を書雲觀に屬せしむとあるに徴すへし。李朝に至りて亦之に倣ふ。されは高麗朝に在りては地理風水の專業者は佛徒の外に又別に其の専修學堂に於て之を學習して後登用せられ、書雲觀に出仕したるものなり。

〔佛徒間の地理學者〕

而して佛徒間の地理學者は道誥より如哲と傳へし派の外に(◎上面:◎道誥より金謂碑・殷元中と傳へし派と)道誥・康靖和・妙清と傳へし＝

派(◎)あり(派とあり。)遂に妙清に至りて仁宗の篤信を博し平壤に林原宮を築かしめ遷都の計畫を立てしむるに至れり(◎上面:◎め、其極

(妙清・趙匡等)平壤の叛擧となる。金謂碑は肅宗元年上書して道誥秘記(踏山歌)及神誌³³・秘詞に因りて西・中・南の三京の地理を述へ、平壤・漢陽の開城に次て國都の地なるを述へ、漢陽にも都城を立つべきを上言し、殷元中亦睿宗朝に至り道誥の説に基きて同様の上書をなす。蓋し李朝に至り漢城に都をなせる遼淵源、亦實に道誥の風水秘記に在りと視るへし。³⁴)

妙清等曰く平壤林原驛は是れ陰陽家の所謂大華勢にして若し此に宮闕を營みて治むれば天下を并せ金國も贄を取りて來り降るへしと。(△次頁:△風水説の高麗國王の如何に深く浸潤せしかは、定宗の圖讖を信して都を平壤に遷さんとし、文宗は楊州即漢陽に南京を築きたり)林椿『西河集』卷五に「逸齋記」あり。蓋し林椿の尤快心の作に屬す。其中に逸齋の父か逸齋か大才を以て世に埋れんことを憂ひ、吉地を相して此に處らしめしを叙する中に、處士殷元忠と翼宗禪師の二人は當代の名地理師なるを以て之に託して爲に吉地を相し、道康郡月出山に軒を築きて居しめ旬月にして王逸齋を邀ひ致すとあり。殷元忠は睿宗朝の人、翼宗禪師は大覺國師の弟子天台宗の名僧なり。(大覺國師寂後、國清寺をただ董す。)元忠の技、『高麗史』列傳方技金謂碑の項にも挿入せらる。亦道誥の流を斟める地師なり。

既にして元朝朝鮮を征服し(高麗)其の正朔を奉し、(世祖皇帝以來、)元との關係逐年親善となり、相互に文化傳(授)受交換をなすに至りても風水説の思想的勢力は依然衰へず。忠烈王三年六(七)月觀候署上書して、造成都監に於て元の風に倣ひて層屋高樓を造らんとするを聞きて、其の高麗の地理上不吉なるを述へ、亦「道誥密記」を引用して

「謹按道詵密記、稀山爲高樓、多山爲平屋。多山爲陽、稀山爲陰、高樓爲陽、平屋爲陰。我國多山、若作高屋、必招衰損。」〔高麗史卷 28-26〕

と云ひ、王も之に従へり。以て國季漢陽に李を植て之を斫倒して王氣を壓するに至る迄、風水説(の勢力)は高麗王家の始をなし終を成せり。

(上面中:雞龍山下に王氣ありの説亦佛家より勸唱せられしか如し。或は又道詵と關係あるに非さるか。『四佳集』文集卷一「雞龍山迦葉庵重新記」に判教宗事順善堂雲叟の言に曰く

「中天竺北有大地軸曰崑崙、々々一脈東北至于海、巋然爲巨岳曰長白山。長白一脈傍海南至雞林爲圓寂山。自圓寂西折遇熊津、縮爲大山曰雞龍、新羅五岳之一。始號仙桃、次曰西鷹、最後得是名焉。其氣蜿蟺磅礴、頗有神異。山之頂出泉、常見躍金色、下有龍潭、黝碧〔可〕慢〔?〕。山之陰安育王塔、其陽薜葱、有王都氣。」

由是觀之、僧家の朝鮮地理説は直に支那に其源脈をおき、又一方根本佛土説と結付けるあり。暗に其著想の後漢法竺の阿育王塔に在るを想はしむる者あり。而して此の僧侶の構想、直に高麗・李朝に亘りて滅ひざるは奇なりと謂はざるへからず。無學の地理的判斷亦實は雞龍山に在りしに非さるか。

(上面右:太古普愚禪師亦風水地理に一隻眼あり。恭愍王、愚を以て王師となす。一日從容、王に語るに王者心要を以てし、又王氣既に開城に衰ふ、南漢陽に移るへしと。『東國通鑑』にも曰く「二月命李齊賢相宅于漢陽、築宮闕。僧普愚以讖説王曰都漢陽則卅六國朝。王惑其説、故有是命。」

維昌撰「圓證國師行狀」亦是事あり。後李太祖の定都に際して無學の言に重きをきし、亦淵源あり。西山大師の神僧と稱せられ風水書に名を留むる、亦同一淵源なりとす。)

李朝太祖は此の空氣の中に生長せるか故に其の取りて替りて王都を新定するに及びて雞龍山

より臨津江口・富平・漢陽と數處に亘りて地理業者と共に審査して容易に決する能はず。遂に(王師)無學禪師の決擇をさへ煩すに至れり。是の如きは單に(李)太祖独自の信仰には非ず。高麗君臣上下の久しき間の堅固なる信仰なり。事は『太祖實録』に詳なり。³⁵

【附記】

本稿は、(基盤研究(C))高橋亨「京城帝国大学講義」の研究(課題番号:16K02200)の成果の一部である。

注

- 1 上面に「ヘーゲル、思想の開展形式、思想の本流と支流、新舊論」とある。
- 2 以下の追加記述の冒頭に△印はないが、ここへの挿入相当と判断した。
- 3 上面に赤字にて、挿入印の無い『漢書』地理志、樂浪郡のみの戸數六萬二千八百十二、人口四十萬六千七百四十八人とあり。」とある。
- 4 上面、この追加文中に赤色鉛筆により「東史綱目再調」とある。この指示に従って追加されたものと思われる。
- 5 『朝鮮學報』第五輯・第六輯、1953・1954に(一)・(二)にて掲載されている。その「小序」を記した高橋は、昭和四年秋に一冊稿を送寄せられた、實は早稻田大學大学院生李相伯の論文庶孽考に対する批評であつて、早稻田大學の依頼によりて草したものである、という。赤字によるこの補足は、天理においてなされたことがわかる。
- 6 挿入記号が前文中にあるが、ここが妥当と判断した。
- 7 上面に「推古天皇十八年、高麗王貢僧曇徽法定。曇徽知五經〔日本書紀〕とある。後に關連記述がある。
- 8 上面に「推古天皇十六年貢僧曇徽法定。曇徽知五經〔日本書紀〕とある。
- 9 上面に『書紀〕欽明紀、十三年、是歲百濟棄漢城〔廣州〕與平壤〔南平壤即漢陽〕。新羅因此入居漢城。」とある。
- 10 上面に「黃草嶺(碑)僧の位地記入」とある。
- 11 上面に「續大藏、華嚴經(感)應傳／『三國遺事』卷三興法、迦葉佛宴坐石／玉龍集及慈藏傳與諸象傳記、皆云。新羅月城東龍宮南有迦葉佛宴坐石。其地即前佛時伽藍之墟也。今皇龍寺之地即七伽藍之一也。〔迦葉佛、釋迦前七佛之第一也七、釋迦之直前也。〕」とある。

- 12 上面に「我道本碑、母謂曰、此國于我々不知佛法。爾後三千餘月雜林有聖王出、大興佛教。其京都内有七處伽藍之墟。」とある。
- 13 上面に「孤雲海東初祖忌晨文〔義湘分〕」とある。
- 14 上面に「大角干傳」とある。
- 15 上面に赤字にて「元來、誓は羅語にて地方の鎮營に用ひられ、善州・漢山州・完山州等におかれたり。幢は軍の隊旌にて即其の隊の異に用ゐらる。而して誓幢其物か新羅に於ける軍號の一にて九ケの隊を成し、衿色を以て區別す。誓幢和上と云ふは、元曉か嘗て此の誓幢隊を率ゐし事ありし爲に世俗、彼を呼稱せる者か。果して然らば、朝鮮古來の諺傳及和尚斷碑の允文允武は信すべしとなすべく、愈々元曉其人の生涯の複雑多様なりしを見るべく、其の傳はらさるを惜むべし。外に芬皇寺にも元と高麗朝に建てし和靜國師碑ありしか、今は其の跖石を存するのみ。典〔地勝〕覽、東京雜記」とある。
- 16 上面に色鉛筆にて「元曉高句麗百濟新羅佛學集成」とある。
- 17 上面に「參考書元曉の分の外、海東（初）祖忌晨文／孤雲の忌晨文」とある。
- 18 上面に「景燈傳統録／海東金石苑／金石総覽／佛教通史／西山碑銘／祖堂集／佛祖源流 禪學思想史」と參考文献メモがある。
- 19 ここから三頁にわたり追加記述がある。
- 20 以上の追加記述のほか、左右脇に以下の赤字による補足記述があり、またその次頁にもある。両方とも文脈からみてここに挿入するのが無難と判断した。
- 21 左脇に『孝經』「ト其宅兆而安厝之」の語は單に吉否をトするにして、風水説なりとは認め難し。」とある。
- 22 この出典は、『易』坤文言の「積善之家、必有餘慶、積不善之家、必有餘殃」である。
- 23 上面に「道の本體／不可説直觀」とある。
- 24 上面に「道は一切に亘る故に説くには深淺あるべき也。」とある。
- 25 上面に「新羅僧階大德・別大德に付ては崔致遠新羅伽耶山海印寺善安住院壁記〔東文選卷六十四〕」とある。
- 26 上面に「新羅朝、既に禪宗と教宗と及密教の三宗各僧階の稱呼を異にせるか如きは、前引崔致遠迦耶山善安僧院壁記に徴すべし。」とある。
- 27 上面に「高麗代降りて（元と宋既に末となりて始めて）宋文宋詩、學はれ東坡を以て準的となすこと（高宗朝李奎報）林椿、崔滋の言ふ所の如し。」と、赤色鉛筆記述に鉛筆による追加記述がある。ところが、次の文にある「東坡」は鉛筆によって削除される。
- 28 上面に「申紫霞、翁方綱に従學し其の心訣を授けらる。」とある。鉛筆による両方とも削除すべきである。
- 29 上面に「僧傳筆記調査！」と鉛筆によるメモがある。
- 30 一字ほどの空白がある。補足の予定か。

- 31 上面に「天乘は無欲界也」と赤インクのメモがある。
- 32 上面に「大通？大匡？／要再調」と赤色鉛筆のメモがある。
- 33 左横に線を引き「神誌とは『龍飛御天歌』第十六章註に「檀君時人、世號神誌仙人」とある者なり。勿論高麗朝に至りて造出されし古代仙なり。〔猶陽村撰「健元陵碑」文及輿地勝覽健元陵部參考〕とあり、また「神誌説明『朝鮮』七年一月號」とある。
- 34 「道説秘記・踏山歌・神誌・秘詞及睿宗年なりし海東秘録等の書は皆今傳はらず。」と赤色鉛筆のメモが横に追加されている。
- 35 上面に以下のような赤インクメモがある
「前學年は高麗初期佛教の大略より風水説を述へて講義を止めたり。本年度は高麗佛教の第二期とも謂ふべき大覺國師の天台宗開立よりして講義を開始せんと欲す。以て李朝を歴て併合前後迄の思想の變遷の大體を述ふる豫定なり。其の綱目の大要を擧ぐれば
一、大覺國師と普照國師
一、麗末斥佛朱子學の傳來
一、麗末斥佛論の二派
一、高麗の道教
一、李朝教政の方針確立
一、李朝斥佛の大略
一、李朝儒學の三期
一、（純一）朱子學的國家の利弊
一、仁祖より正祖迄の對支思想の變化調和
（一、基督教と西洋文明）
一、李朝末佛徒（教）の存在の理由と佛徒の三教合論
一、併合當時の道學者の態度並に其の學說
一、併合前後の新宗教の叢生
述ふべき事甚多くして而して時日少し。主として其の輪郭を述ふるに留るべきを遺憾となす。」